

大人と子の  
物語

第一 第二

大 號 一 卷

謹 告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者者之に應ずるものとす。本誌は一般讀者の寄稿を歡迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手撫歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡て左の規則によるこど。

- 一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書振假名附のこと。
- 一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。
- 一、原稿は、一切返附せざること。
- 一、封書の表には、凡て婦人と子ども投稿と明記せらるべきこと。
- 一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。
- 一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

發行 每月一回五日發行○第一號明治三十四年一月二十日發行

價定	文注	購	讀	編	廣告
一冊前金拾錢郵稅金壹錢○六冊前金五拾七錢郵稅金六錢○拾貳 冊前金拾錢郵稅金拾貳錢○臨時增刊は其都度定價を定め て別に申し受く○切手代用は壹割増にて壹錢切手に限る	收は織て前金にて日本橋區本石町三丁目二十三番地金昌堂宛領 し送金は別に發送せず本誌の到達を以て領收の證と心得らるべ 事見本を要せらるゝさきは郵便切手併し壹錢に限る○拾 貳枚を添へて申越さる可し	宿姓名は楷書にて御認めの事○轉居の節は新舊共に御通知 を乞ふ○前金御送付を乞ふ○御印を乞ふ○御印を上に附し候 間前金御送付を乞ふ○御印を用なき時は御断りを乞ふ	學校附屬幼稚園會及原稿御寄贈の節は東京本郷區女子高等師範 學校附屬幼稚園内フレーベル會宛のこそ	文	發行

明治三十四年十月二日印刷  
同 年十月五日發行

不許  
複製

發行編輯者 東京市本郷區元崎二丁目六十六番地  
東京市神田區錦町一丁目十九番地  
東京市神田區錦町三丁目二十五番地  
女子高等師範學校附屬幼稚園内所  
フレーベル會

大賣捌所 東京東京堂●同東海信文合資會社●同北隆館  
發賣所 金 昌

# 婦人と子ども第一卷第十號目次

子ども

鼠と鳥とむすびとの話○室内手あそび○ワシン  
トンの勇行○一口話○考へ物

家庭

庭

清潔と快樂  
親馬鹿

香園女史

口は幸の基

林

高木四郎

今昔いろは料理  
看護法

醫學士

岡長瀬複三郎

かり

食はず嫌ひ  
児童に對する言語

長野飯島八千

田藏子溪

らんぶの話  
講義

藝術

石井泰次郎

岡本ち

幸福とは何ぞ  
五十音歌

岐阜縣東京古松林

原壽翠

兒童研究法  
文苑

文學士

松本孝次郎

十月の天地  
穎敏な娘と母の愛讀の書

Yま、か、I生

生

ヴィクトリア女皇の傳  
文苑

鄭越生

和森岡影生

懸賞質問題一題

雜錄

Yま、か、I生

杵の露  
細川忠興夫人

秋

小島たつ子子

和森岡影生

續比較

鹽焚く老爺

幼薦湖紀行  
幼稚園

秋

和森岡影生

數十件○會報

滌

滌

本號には懸賞論題あり!!

公海邊の夕暮  
月友に別るとして  
全山里の月  
和歌初秋の風、秋の山家、水  
俳句  
月は故郷の友  
布小東  
林恒  
木まつ  
子舍子子火  
校の詩人  
さり  
の恒  
子舍子子火

ふ乞を記附御旨るた見を供子と人婦は方御の文注御り依に告廣此

伊故實禮謚松岡流。武家禮節小笠原流。三講師石井泰次郎先生製作

●淑女諸君へ謹んで告ぐ●

壹組解説共

實價金壹圓五拾錢

郵稅金 拾 錢

生著石井先 紐結包物教授法

美本紙百穿  
插圖百二十個

全一冊附屬



●體裁

〔紐結標本へ美麗ナル絹紐ニテ製シ厚キ臺紙貳面へ廿余種ヲ綴付ケ、包物標本ハ和紙ニテ製シ合判ヲ附シ開閉自在トナシ厚キ和紙ノ套ニ二十種ナ納メ、解説書ト共ニ是ヲ優美ナル帙挟ニ入レタル極メテ高尚ナル標本也。〕

方今女子作法の一部として盛んに教授せらるゝ紐結包物は、我國禮節の花にして女子必須の技藝なるとは言を俟たず從て古來其書なきにあらずと雖も圖面又は解説のみにて誠に解し難きのみならず誤傳多くして信すべきもの最も妙し著者石井先生は有名なる禮節家なる事は普く世人の知る處なり包結の法漸く其眞を失ふとするを慨き自ら是か難形を製作せられ且附するに詳細なる解説を以てし傳引旁證包結の沿革を書き諸流の異同を辨ト方今のかの缺を揚げ非を匡し、且是が製作の順序より使用法に至る迄一々密圖を挿みて之を説く恰も手を採て教ゆるか如く實物と對照せば眞に炳として火を睹るよりも明なり希くは各女學校一般各學校及び淑女諸君速に採て以て研讀に資せられん事を謹告

發行所

東京市日本橋區通二丁目 嵩山房

小

林

新

兵

衛

電話本局百九十五番

ふ乞を記附御旨るた見を供子と人婦は方御の文注御り依に告廣此

發

兌

東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地

金

昌

堂

女子高等師範  
學校講師

岡田起作先生編并書

東京府師範學校教諭  
兼附屬小學主事

立柄敦俊先生校閱

(前付の二)



全四冊

訂正  
六版

小學國語綴方教授書

冊一全

卷一金十一錢  
卷二金十一錢  
卷三金十二錢  
郵稅各金二錢

卷四金十五錢

郵稅各金二錢

全二冊

上卷金十八錢  
下卷金三十錢  
郵稅各金四錢

全二冊

上卷金廿五錢  
下卷金廿八錢  
郵稅各金四錢

國語研究會編

新兒童文例

全二冊

定價  
金二十五錢  
郵稅金二錢

定價金十錢  
郵稅金二錢

定價金十錢  
郵稅金二錢

教則は文部省令第十四號を以て改正せられ尋常小學の國語科に用ふべき假名、字音假名遣及漢字等は其の第一號第二號第三號の表に依りて指定せられたり而して從來一科を成せる作文科は之れを國語科中綴方として教授すべきことなりとし茲し國語科教授上の一大進歩にして又大改革なりと謂ふべきか本書は該省令に準據し國語綴方教授の次序を正し方法を記述したるものに就いて教育経験家著氏の開体なる國語研究會の編輯に係して最も適當なるのみならず直に探て教授草案に代ふことを得べし實に近來無比の好著なり

此廣告依に告御文方は婦人と子供を見る旨御附記を乞ふ

鈴木米次郎作曲

唱歌遊戲研究會編纂



# 全冊一卷

總クロース

金文字入  
橫綴頗美本

定價四拾錢

郵稅四錢

本集ハ著者ガ師範學校、中學校、高等女學校等ノ爲ニ實地教授ノ上再三修正ヲ加ヘラレタルモノニシテ內容ノ歌曲各々特殊ノ趣味ヲ有シ艶麗ナル溫雅ナル清爽ナル等皆其詩情ニ調和セリ願クバ一本ヲ縕キテ樂ト詩ト繪畫ノ完備セル内容ヲ嘉シ學生ノ教養ト子女ノ愛育ノ資ニ供へ給ハシコトヲ

其適否ヲ試ミラレ以テ完成セリ▲該書ハ普及舎編纂ノ新編修身教典各課ノ目的ト各章ノ主眼トヲ一致セシメ修業ヲ授クベク歌詞用語ノ如キハ國語科ト其程度ヲ等フセラレタルハ實ニ他ニ其ノ比類ヲ見ザ

尋常科第一學年より  
高等科第四學年まで  
尋常科第一學年半用上卷  
洋製美本繪畫插入  
正價金八錢  
郵稅金二錢

全下卷近刊  
六冊

● 幼年唱歌  
本集ハ著者ガ師範學校、中學校、高等女學校等ノ爲ニ實地教授ノ上再三修正ヲ加ヘラレタルモノニシテ內容ノ歌曲各々特殊ノ趣味ヲ有シ艶麗ナル溫雅ナル清爽ナル等皆其詩情ニ調和セリ願クバ一本ヲ縕キテ樂ト詩ト繪畫ノ完備セル内容ヲ嘉シ學生ノ教養ト子女ノ愛育ノ資ニ供へ給ハシコトヲ

日本遊戲唱歌  
各上編四錢  
中編五錢  
下編二錢  
郵稅二錢  
冊出

日本遊戲唱歌  
各上編四錢  
中編五錢  
下編二錢  
郵稅二錢

發行所

東京銀座三丁目二番地

十

字

屋

(電話新橋一千二百五十九番)

ム乞を記附御旨るた見を供子と人婦は方御の文注御り依に告廣此

高等師範學校教授吉田彌平君校閱 女子高等師範學校教授齋藤鹿三郎君并序 國語研究會編

新用兒童普通文例

全一冊近刊  
和裝美本 十二月中發賣

昨年改正小學校令施行規則を發布せられて以來國語科教授は一大變革を生じ就中生徒に綴らしむべき文體に至りては意見百出殆んど歸着溫和漸進派の學者と實驗教育者との團體たる國語研究會が一年有すべき所なし、本書は實に各地方數校の生徒をして文體に頓着せず思ふがまことに綴らしめたる材料を長特に舉ぐべきもの三あり。○文例を示すは已れも新題をとらへて書いて見んとの念を誘發するにある事。○文體頗る話語に近くしてしかも格を失はざる事。○文例の内容及程度は總て児童の思想児童の學力より成りたる事。

（後附の四）

教師諸君の参考としては國語綴方教授書と相俟て教授の指針となり生徒にして之を讀まば蓋し興味津々たる中已れの文材を誘發りられ思想一たび浮べば筆之に隨ふの境に達し得ん

東京市日本橋區本石町三丁目二十三番地

發行所

金昌堂

婦人と子ども 第一巻第拾號

（明治三十四年十月五日）



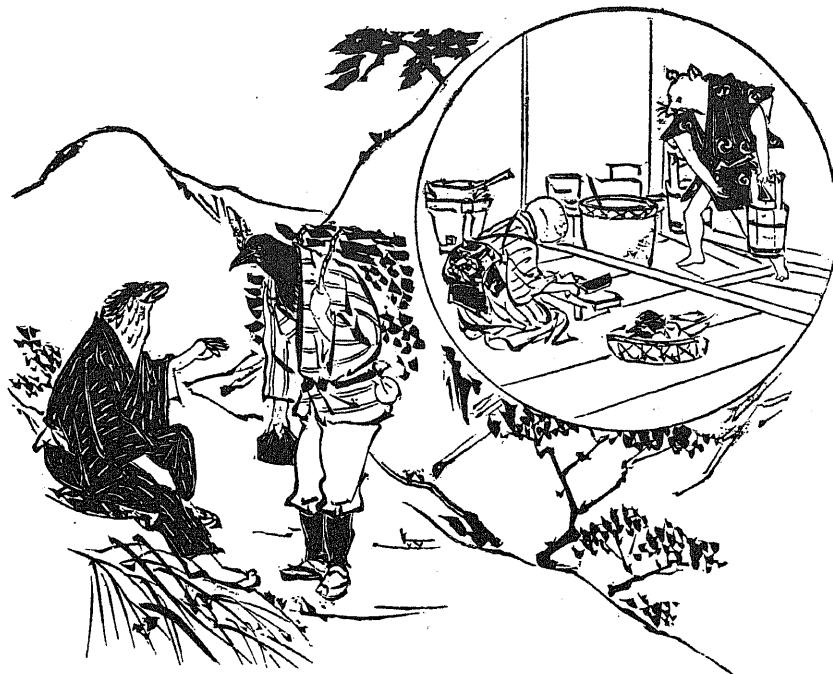
鼠と鳥とおむすびとの咄

さてもある處で、二十日鼠と鳥とおむすびとが友達になつて一所に家を造らえました。まづ木をきつて來るのが鳥の役で水を汲んだり火をたいたりが鼠の役でそれから料理番とゆーのがおむすびの役とゆー風に各自仕事をわけて毎日仲よく暮

して居ましたから だんくとお金も殖えて来ました。

處が 善くなるに従がつて 誰でも何か他の事をやつて見たくなるとゆーのが人情です。夫で或日のこと 烏が家えの歸途で 偶然鳶に出遇つた。『やー是れ』といつて挨拶をしましたが 話の序に 鳶わ 今のは自分の家の様子を話して 大變具合が宜ーといつて自慢をやつた。

すると鳶わ 苦笑しながら 『そりやー君にも似合わない事をやつていいじやありませんか。まー考



えて御覽なさい。鼠で  
見ると水を汲んで火  
を焚いといたらもー  
夫つきり自分の室え歸  
つて御飯の出来るま  
で休んでればいーので  
しょー。またおむすび  
で見ると一日火の側  
え座つて居つて御飯  
の番をして出来た時

分にちよいと裏の畠から大根や葱を取つてきて  
付けて出すつきりのこと夫に君の役わどーです  
此遠い道をはるぐとそんな重い荷を脊負つてさ  
よくく割の悪い話じや

そこで鳥わ『はてな』と考えたが先づ黙つて  
家え歸つてやれくとゆ一ので脊中の荷を下し  
てさて三人一所に御飯をすませ明くる朝まで一  
所に寝て仕舞つた。

所で明日になつてさて毎日の様に各自仕事に  
からるとゆ一時になつてさ一鳥が木をきりに行

かない『今まで大分ながくきつい働をしたから、今  
 日からわ一度仕事を取り代えんければいかぬ。』と  
 ゆーのです。そこで鼠とおもすびとがよってか、  
 つてその事がいけないからもとく通りにやろ  
 ーでわないとゆーことを口が酸くなる程いって  
 見たが烏わ頑として聞かない。じやー仕様がない  
 夫てわ籤を引いて番をきめよーとゆーので籤  
 を引いた所が今度わおもすびが木をきり番で  
 鼠が料理番で烏わ水汲みとゆーことになつた。  
 さーこれでどーでしょー。仕方がないから各自其

仕事に取りかゝったですが、さて大變が起つた。ど  
 申すわ、おむすびが明日の木を取りにいつたきり  
 まつても、く歸つて來ない。二人わ心配した  
 何か途中で災難でもあつたのでわないか知らんも  
 うたまらないとゆ一ので、鳥わ一寸飛んで行つて見  
 て來よーといつて家を出た。

すると直近くで、犬に出遇つた。今しも此犬が  
 おもすびを見付けて、たゞ一口に食つて仕舞つた所  
 だつたのです。夫で烏わ非常に吃驚して、ひとく犬  
 を攻撃しました。なんだつて君丸で強盗じやないか

といつて見たが 犬の方わ一向平氣なもんで『だつて握り飯だもの 道に落ちてたから僕の食く物だと思つて食べたのだ』 こゝいわれて鳥も仕方なしに すごくと家え歸つて来ました。

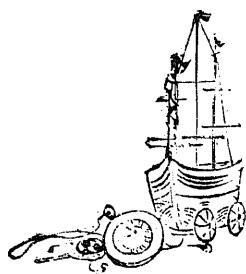
で家え歸つて其事を話した所が 鼠も大變悲しんだが も一諦らめるより他に仕様がない まゝ二人で出来る丈甘くやつて見よーとゆーことにして。夫で鳥がお膳を用意すれば 鼠か御飯を搾らえるそれから鼠わちよいと葱ねぎを取ろーと思つて 裏の畑え行つた所が さー大變 そこにわ一匹の黒猫が見て

居つて『あつ』とばかり鼠が逃げよーとする所を  
たゞ一口に咬えてしまつた。

そんなことわ知らないで 座敷でわ鳥が ちやん  
と膳の側に座つて 待つてもく 料理番が出て來な  
い。待ち勞れて勝手へ行つて 呼んで見ても出て來  
ない。仕方がないので自分で 火を焚いて見たがど  
一も甘く行かないもんだから 少しやけ氣味になつ  
て 火を其儘置きつ放しにして 又探して見た。そ  
ここしてゐる中に今度わ大變がもち上つた  
前程置づばなしにした薪から火がうつつたと見え

て 家中 黒煙 になつて 大火事 が 始まつた。『是れ』  
 と 驚いて 鳥が 飛び出よーとしたが 煙で 以つて  
 も一出ることも 出來ないで とーく 焚け死んで仕  
 舞いましたとき。

(おしまい)



## 室内手遊

### 摺み方

今度は摺み方を申しましょ、摺み方の紙は、たゞの半紙でもよろしくございますが、もし千代紙とか色紙とかをつかえば、なぞ奇麗でござります。

紙の質はやさしいものを摺むには、どんなのもよろしくございますが、むづかしいものになりますと、糊氣のない半紙か美濃紙がいたしませんと、破れたりすることがあります。

紙の大きさは半紙を、縦に、三つに切つて、それをま四角にした位が、丁度よろしくございます。

先づ圖の通り一番から順に摺んでみましょ、一番は縁とふちとを、能く合せて折り目を付けるのです、摺み方には、この折り目を付けると云ふ

ことが、肝腎でござります、どんなによく摺まうと思つても、折り目を付けなければ、きつと曲つてしまつてうまく出来ません、折り目を付けるには、片手でずらぬよーに紙をおさえていて、片手でそ一つとこすればよろしいのです、あまり力を入れて、こすりますとけばけばがたつて、きたなくなります。

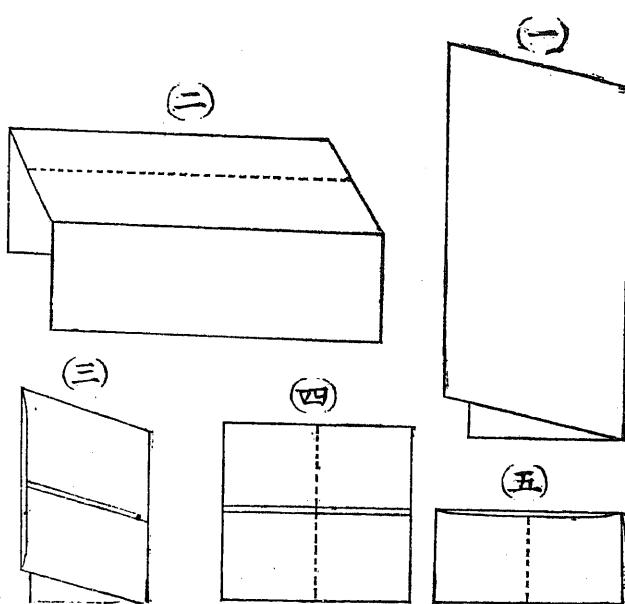
外のふ話が長くなりましたが、さーこゝに出来たものは、立てれば屏風になりますし、平に置けば本のよーです、屏風にしたならば、中え繪をかいてみてもおもしろいでしょー、本にしたならば表にどち糸をかき、本の名をかく紙などをしてよろしいでしょー。

二番目は机です、この机は前の屏風をひろげてまん中のすぢの所で、両方の縁を合せて、折り目

をつけて立てるのです。

三番目は前の机を、立てずに横に二つに折るのです、圖を能くどちらんなさい。小さな屏風です。四番は前の屏風の折り目の所で、両方の縁を合せ、能くおしをおくのです、これは坐蒲團にいたしましょー。

五番は前の坐蒲團を、表の合せ目の通りに、二つに折るので、紙入れになります。  
まだありますが次にかきましょー、皆さんも考えてこしらえてどちらんなさい。



## リシントンの勇行

やまととの翁

時は千七百五十年の春、空うらゝかに風長閑な一日の午後、場所は北米バージニア洲の北に當りて著明なる河流に沿へる森林地の一帯。

そここゝには測量機械が散亂して居る、數人の人々は新緑滴る樹蔭に休息して、こゝに三人處に五人、身裝やら容貌やらで見れば此等は田舎の荒地を開拓せる工夫の一群だと知れる。

今しも彼等は漸と晝食を済した所なのである。

一群から離るゝこと約二三丁、丈高く骨格逞ましき一人の少年、端然たる姿勢を備へ確乎たる歩調で以て逍遙して居る。年齒まさに十有八、併し其容貌には年に相應しからぬほどの有爲果敢の氣象を備へて見へる。

十二

忽ち一聲悲鳴の叫が聞えた。間もなく又一聲、

續いて響く亂調の喚聲、聲はまさしく婦人の聲だ。最初の一聲で、少年は僅に重々しく頭を其方向に轉じただけであつたが、急激な亂調の叫を聞くに至つては、彼は疾風の如く身を翻へして其方向に當つた森の方へと衝き進んだ。

と見れば、彼は其森を出て河岸へと出た。今しも彼の仲間がこの河岸に群て、しきりにがや／＼と騒いで居る、眞中には一人の婦人、二人の工夫に捕へられたまゝ、一生懸命にふりはなそゝともがいて居る。前の叫聲は云ふまでもなく、此婦人から出たのである。

少年の急いで近づき來たのを見るや否や、婦人は必死の聲を絞り出した。

『オー、貴下、どうか……どうか助けて下さい

こゝを離さし下さり、家の子供……可愛い坊が溺れてゐるのです。それに……それにどうしても離してくれない……』

甲工『まるで發狂の様なのだよ、離したら直飛び込もうといふんだから』

乙工『この早瀬だもの、なんの事はない、見る中に粉微塵だ』

少年は殆ど之等の問答を待つて居ることが出来なかつた。と言ふのは、彼の子供といふのは、少年のよく知つてる今年四歳になる活潑の男の兒で、其丸々と肥ゑた薔薇色の頬、美くしい碧の眼、麻の様な房々とした縮れた髪は、何人といへども愛せざるを得なかつた子なのである。

平生自分の庭内で遊んで居たのが、今日は垣の門の開いてるのを幸に、母親の目を脱して庭の外

へ出て、今しもこの激流の岸邊に立つて、身を屈めて水面とのぞき込まうとした所であつた。之を見た母親が驚の餘り、思はずも發した叫は、不幸にも變事を速めたに過ぎなかつた。とゆ一のは子供は母親の叫に驚いた所から忽身重の平均を失つて、あなやと見る間に岩を喰んで渦まく激流の中に、無残にも陥込んで仕舞つたのである。

夫つといふので數人の男は、直に駆げ附けた。

まことに子供に續いて飛ぶ込まうとしたのであつたが、しかし、屹崛としてけづりなせる岩石に激して、深藍色の水一面に、白沫澎湃として涌かへる急流の物凄さに膽を冷されたのと何處にまひ込まれたものか、もー、蔭も形も分らなくなつたといふ所から、殘念にも其企を中止した所なのであつた。

敢爲なる少年に取つては然らずだ。眞先に彼は上衣を脱いだ、續いて彼は河岸の端に衝つ立つた

そして恐るべき眼下の光景に忙はしく其爛々たる

眼を走せながら、縦横に奔逸せる急流と最危

險に見ゆる断岩などを一瞥して、游泳の方向を定め

たるは、實に一瞬間に過ぎなかつた。といふのは

少兒の衣服でもあらうか、水面にチラと白いものが見えた、もはや顧慮へる隙もない、身を躍らせて此敢爲なる少年は、逆まく急流に飛び込んだ。

『オー神よ、彼こそ妻の小兒を助けて呉れるに違ない。あれへ彼處に……オ一坊よ、今に助けて呉れるよ』

母はもー一生懸命である。人々は断岸の端先へ衝き進んで各々其熱心の眼を少年の進行に注いで

居る。急流は容赦なく彼を流し去つて、譬はば嵐が秋の木の葉を弄んでるかの如くである。

見物の息は悉く死した、其顔色は水の夫よりも尙青い。

嵐に於ける木の葉に似たる少年は、あなやと見る間に、轟然たる響と共に白沫天に朝する絶壁に衝き當つて、骨も肉も微塵に粉碎したかと見れば又一渦千里の急流は、小鳥をねらつて射來る早鷹の如くに彼を流し去つた。併も次の瞬間には忽然として程遠き下流の表面に顯れて居る。

かくて断岩怒濤の間をぬけつゝよりつ、此尊むべき少年は、拔手をきつて進み行く。岸邊の人々は、この勇ましさ、動振に見惚れて、呆然として聲も出ない。梢を拂ふ颶々たる風の音のみ、轟々たる激水の響と和して、一層光景の淒愴を増す

みである。

(未完)

### 一口ばなし

●或人がよそへ御遣ひ物に八尾の大鰈を持つて行きました。所が、先方は大變な不機嫌で、いやも一散々に怒り散らすので、此方は少し勃然して、何故そんなに怒るかと聞いた所が『鰈を八尾持つて來たのだから、しかれどといふんだと思つて』といふから『いや夫は大變な違だ、私の方では、よかれ／＼の積で八尾持つて來ました』

した。

●或貧乏人のれ酒呑が、毎日夕飯の時、れかみさんにて一錢づゝ渡して酒を買つて來て貰つて夫を何よりの樂にして居ました。所が或時大變お金に困つて、おかみさんに相談しました所、おかみさんは、いくらといふことを聞いて『その位なら』と

いつて澤山一厘錢を、ナシに挿いたのを出して來ました。主人は吃驚して『どうしてこんなに、貯めて居つたのか』と聞いた。すると、おかみさんは『あなたが毎晩二錢づゝお酒を買つて來いといつて、渡し下さるのを、すまぬと思つたが、一錢九厘にして其一厘を貯めて置きましたのですが主人は大變に感心して『それでは、これからお酒を已めれば、一層澤山貯るだら一から、今晚からりも一已めにしよー』とゆーので、お酒を已めました。

さてそれから暫ちまして、又々お金に困つたことが出來たので今度こそはと思つて早速おかみさんに相談しました、所がおかみさんの云ふには『もーわれつきり、あなたお酒を買つたことがあ

りませんでしたから、一厘も貯りよーがありませんでした』

十六

### 考へもの

前號の解

(一) 黒い羊は殆世の中にありませんから

(二) 時間

この次の考へもの

- (一) 可愛い一人兒の旅立とかけて
- (二) 曲つた杉の木とかけて なんとく。



### 家庭

#### 清潔と快樂

#### 香園女史



清潔といふことは誰しも好まないものはあります  
んが往々奇麗といふことゝ世の中では間違られて  
何でも美しく飾らなければならぬといふ様に思  
ふ人もありますが此處で申します清潔は即ちサツ  
バリとする事であつて左程六かしい事でなく又別  
段金錢を費さなければ出來ないといふ事でもあり  
ません併し何處如何なる場所にても如何なる物にも

必要のこととて又實に愉快に感じますもので御座います  
 清潔に致します事は衛生上經濟上何れの點よりいふも誠によきことで身まほりの事について申しますと先づ入浴いたした時の心持頭髪を洗ひ新しき衣服なればもとより御座いますがさなくともサツバリと洗濯した衣服を着ました時は實にいふにはれぬよい心持です又部屋について考へて見ましてもサツバリと拭き掃除をしてある部屋へはいりました時は誠に愉快で其所にて見るものは聞くものはすべて心を樂しませざるものはなく飲み物たべるものも皆いしいと感じますこれは全く清潔が自然に心を樂しませたのであつて其樂しい心でむかへますから何も角も快のでありますからそれに反対で如何に珍木良材を以てつくりたる家

屋であつて金銀珠玉を以て飾りたて如何なる名工の作にても常に拭き掃除を怠りましたならば何時の間にか部屋の隅々より戸障子など塵埃にて埋められ柱棚床などは次第に黒ばみ疊は何となく濕りたる様になりまことに不快に感じます又衣服の方よりいふも如何に地質はよく美しい品にても衿あたり胸から袖口の方まで塗りしことくに垢付けたり胸から袖口の方まで塗りしことくに垢付けられるはよそより見ますのも誠につらいものですそのほか山海の珍味にても器物が不潔で御座いましたならば誠に心持のよくないものですしかし始終かゝる不潔なる家に住ひ垢付ける衣服を纏ひ居らば別に不快にも感じますまいがこれが爲めに知らず識らすの間に身體を害ふものであります生れつき虚弱な人もありますからどんな清潔な部屋に居て身體衣服も常にサツバリとなしても病氣になる人

もありますが一家に絶えず病人のあるといふは此不潔が原因になることが多いと思ひます流行病などのあるときは御互に一層の清潔を守らなければなりません病人あれば自然と心配が顔にあらはれて不快となるものでありますから其不快をつくる源をどうのけなければなりません

或人の申しますのに清潔なる衣服をきる時は實によい心持であるから我人も人も何時もサツバリとしたい室内も清潔なれば外より歸りたる時などは何となく楽しい殊に暑さの折などは猶更であるなどといひながら私の内は忙しくて掃除などするひとがありませんとか子供が多くて片付ける暇がないとかいひ部屋といへば何時もとりみだし障子は或は破れ或はいたづらがきせらるゝもすこしも心にとめざる人があります忙しき務があり又

子供多き人などはあるへき事ならんとをもへどこれも心掛によりては全く爲し得られることはありますまい忙しきなかにてまめに勵々摸範をしめしますのは自分の身體の爲でもあり又一方にては子供等の教訓にもなりませうと思はれます

故に部屋の掃除は勿論衣服器具より身體の清潔に至るまで氣をつけませんければ衛生上經濟上よろしくないばかりでは御座いません一家不愉快の基となり其人の心の底まで見すかされ其人の品位を落す事になります少しく心掛さへすればサツバリと心持よくなさるものでありますから一身一家のため押し廣めては國家の爲め常に身に行はなければなりません

親馬鹿

ヒッポ・ボタモス、アイランド

親馬鹿と申しますから、外の方から見なさつては實につまらない話かも知れませぬが、一つ二つ自分の子供の事を申上げて、子供の子供らしい一端をゑがいて、其扱ひ方を尋ねて見ようと思ひます。子供は中々理窟ぽいものかと思ひます。私の長男は丁度四年六ヶ月でありますか、過日も洗湯からの歸道で、陰曆五六日ばかりの新月を見て申しますには「お父さんあのお月さんはどうして細いの」「どうして、お前はそくないお月さんを見たことがあるか」おせんに見たのはまるかつたようをも云ひかねまして、と申して、まんざらううでもなく、子供相當に理解してやる事は、早速

に出来ませなんだから「どうして、それは子供にはわからない、もつと大きくなつたら教へてあげやう」とまづいながらにげを張りました。彼は誠に不承無性に其問題を止めた様でありましたが、五六歩の間無言で居つて借申しますには、「何が光つてゐるの」「それは子日か當つてゐるのだよ、こゝは低いからも一日が暮れなければと子、お月さんは高い所にあるからまだ日があたつてゐる」是丈でふけば下の様に揚足をとられんで済んでありますたが、前の問題もまだ氣に掛つて居る親心からして、「お月さんはいつでも丸いのだよ、だけどお日さんのあたつてる所しか見えないのだから、それであるくなつたり細くなつたりするのだ、わか

「ア、わかつた／＼子供こどもでもわかるだらうか。」

●子供の理窟ほいのは誠に調子が揃ひません。右

の様な大層理窟をかます事があるかと思へば、又左の様な無邪氣なのが有ります。一躰子供の目には雨といふ物は見えないのかもしけませんが私の子供は雨を苦に致しません。「けふは出なさんな雨が降つて、濡れるから」と申す事が毎度ですが、ある曇つた日(梅雨中)彼は突然と「おつかさん今日はお日さんはでない子、雨が降つて濡るから子

あつて濡るじやないか」

●右の様な調子で彼は今切に「自分かどこから生れて來たか」を穿鑿して居ます、私は自分も少しいとき其穿鑿をして母親から「氏神の社宮から生

れて來た」と教へられた事を記憶して居ましたから、試に之をあてはめました、最初の内はそれで宣しいでしたが、どこか友達の家で「母から生れた」といふ事を聞いて来て、「お母さんは誰から」「祖母さんから」「お祖母さんは誰から」「よそのおばさんから」など、詮議しますが、大抵「よそのおばさんを三つばかり繰りかへせば満足します、この穿鑿はまだこれ位では止まらないで、もつと答へ難い事になつて來ようと思ひますか、どう扱へば宜いでせうか、私は仕方のない時にはいつも目の前の出来事(又は特に出来事を起して)

を以て彼の心機を一轉させてやつと難關を切抜け  
る様にしてゐますが、これはひどく惡いぢしよう  
か、先生方の教を仰ぎます。

●やはり理屈つぽい例かと思ひますが、此間母親  
が庭で何かして居つて彼の書いた爲體の知れぬ書  
をふみ散しました所が彼大に腹を立て、「折角書  
いたものを母さんが消してしまつた」といつて  
泣き出しまして、「御免なさいといひなさい」とせ  
まります、そこで母親は「知らなんだのだからさう  
腹を立てるものでない」と却つて勘忍といふ事を  
教へやうとします、遂に母を打つたといふので、  
事件か私の手許まで持込まれて來ました。私は「な  
ぜれ母さんをぶつたのだ」「ほんの書いた書を踏ん  
て消して仕舞つた」「しかし知らないでしたのだか  
ら、こらへてあげるものだ」「いやだ親だから春子

（妹満二年六ヶ月）なんかなら……」

右のぶつといふ事は恥しい事ながら、内で手本  
を出して居る事で、子供が全く譯のわからぬ駄  
々をこねるときは、私は多くは脣べたをひねさり  
ますし、家内は時々脣べたか外股の邊を平手でぶ  
ちます、一躰ぶつ事は徹頭徹尾いけない事でせう  
か。「親の答を知らぬ子」といふ語は多くの國では  
善い子供の符徴とはなつて居ないやうですか、併  
し教育學の方では大方は之を非難して居るとか、  
どんなものでせうか皆様方の御判断を願ひたい。」  
次には斯様な場合に母親か子供に詫をしたもので  
あらうか、子供の道徳の最初は親に服従するのに  
あるとかいへば或は獨裁權をふるうて親に向つて  
何だと叱りつけたものであらうか、はた堪忍を教  
へたものであらうか。

又「親たから堪忍がでさぬ」とは彼は堪忍は已より勞つた者に對してする事と思つてゐる證據で之は平生。「春子はちいさいのだからそれをかしてやりなさい、こらへてやらなさい」などいふ事が多いためあります。

(未完)

## 今いろは料理(ち)

石井泰次郎

茶巾たまで

たまごの新らしきを鍋に入れて、鍋の湯のぬるまの内より煮込みて、ふよそ十五分間位にて、網杓子に掬ひ上て見るべし、上ると其まゝ皮の水氣の乾く時は最早なかの水分なきなり、又から乾くに間ある時は未た中の水分あるなり、如此してか

らの直ちにかわくをゆで上りの標として鍋をおろして、鍋の中に水を加へて手を入れるゝほどになし、手にて玉子一つを取出して、鍋のぶちにてからをあてゝ破れめを付てからをむき去り、のこらず皿にとり、薄刃庖丁刀にて白味を二つに切かけて、中の黄味を丸のまゝ出すべし、さて黄味と白味と分てふきて、先白味を馬尾篩にて漉すべしするなうの上に白味をのせて白味三ツのかさに白砂糖六匁食鹽五分のわりに合せて木杓子にて押て漉すべし。次に黄味を馬尾篩にのせ黄味三ツの中へ砂糖三匁食鹽五分を入れてのわり合にて漉すべし兩方こして、布巾に三ツの玉子なれば四つ分になしおき、白味と黄味とを布巾の中に並べて入て、つゝみて右の手にて捻りて左の手の大指にて下をおし、又大指の元のふくらみたる所にても、そつ

とおして布巾よりそつと取出すべし、さて蒸籠に  
入れて十分間ほどむしてよし。

### 茶巾さつまいも

是右に同じ様なり、さつまいもを皮をむきて  
二分位に切ても、又は丸のまゝむしても、

切てする方は切て水に入れて、よくさらし、水をか  
へふき鍋に湯を煮たて、入て五分余ほど湯でゆ  
だりたらばざるへ上で湯を切て、次にうらごしす  
るなり、又むすかたは三十分ほどむして、皮をむ  
きて、切て馬尾篩にてうらごして、布巾に包み  
て形をつくるなりさつまいも四十匁に砂糖十匁の  
わりにてよし、但水分多きいもは六十匁以上にな  
れば其わり合は能々試みて知るべし。

### 看護法（前々號の續）

#### 醫學士 長瀬復三郎

子供の外部はさう云ふものですが精神にしても  
精神上の病氣のある子供ならば元來五官の發育と  
子供の精神の發育は伴ふて行かねばならぬもので  
すから五官の働きが完備して居るや否と云ふ事を  
見るのは子供の精神の發育如何を見るに必要な事で  
ある、學齡に達した子供ならば絶えず身體を動か  
して居て人と一緒に遊ぶ事も好きであり、自分の  
判らぬ事の事物をば知りたいと云ふ疑ひの念があ  
るとか云ふやうな事が子供の氣象である、其子供  
が外見上さう著しく變化はなくとも皆と遊ぶ事が  
嫌で部屋の隅にスクンで居りたいとか身體も餘り  
動かず倦怠の状態があれば即ち其子供は精神的に  
何か不愉快な事があると云ふ事が推察が出来る、

日本の學齡六歳になつて學校にやると云ふ事は五官の機能なり精神の機能もそれに伴ふて來る時機を待つて教育を始め、五歳未満の子供には重き課業を與へても覺えられもせず、唯子供の脳を勞らすに止まつて居る、今日はドウ云ふ有様になつて居るか知らぬが私共の小學校の時代を考へて見れば隨分年齢に不適當の課業を與へて休息の時間も少なく、日本の習慣として女の子供は歸つてから三味線とか踊とかを習ひにやるとか、琴を習ひに遣るとか、東京などには殊に此の風習が多いことは愉快でもない、さう云ふ事を教へに遣るは子供に不適當の事がと思ひますが、さう云ふ事がありますから子供の朝の課業と午後の課業に子供の精神が何の位勞れて居るか、健全なる身體に健全なる精神が宿る云ふ事が言はる、ならば又精神が不

健全であつたなれば其子供は不健康の基礎になると言ふ事が言はるゝでないかと思ふ、精神を疲勞させて置くは神經衰弱とか、習慣性の頭痛とか云ふものの土臺となり教育の不適當な所から來るものが多く故に朝の課業と午後の課業に子供の五官の働きに差違があるか、午後は遲鈍になつて居らぬかと云ふ事を調ぶれば面白い事であらうと思ふ今日は總論にして置きまして營養法はどうとか、牛乳或ミルクはどう云ふ風に薄めるとか云ふ事がありますですがそれは措きまして、先づ大体だけ申します、私の話は内科的の病氣でありますから、それにつけて加へて外科的の病氣は急の療法として打撲した時又は、止血療法とか云ふ事をお話しをし又眼科の病氣は子供にはトラホームなどが多いがこれはトラムーラとかこれは結膜炎とか云ふ事は醫

者の鑑別する所であるから、一般的の注意にとどめ學校で重もに注意せねばならぬは傳染病呼吸器の病氣、近視眼とか脊髓の曲つて居る事とか云ふか重でござりますからさう云ふ事を先に御話したが宜いと思ふ、皆さんは云ふ事に就て他に御望みがあれば問題が出来て御話を致します、餘り長く御話を致しました。(つづく)

### 涎掛

#### 岡本ちか

幼児生れ出でより二三歳位までは絶えず涎を出す故に下顎喉頭のあたりいつも湿び居り甚だしきどきはたゞれることさへありて着物なども常にぬれ不潔となることが多し。されば衛生上、經濟上何れよりも幼児には涎掛けをなさしむること肝要な

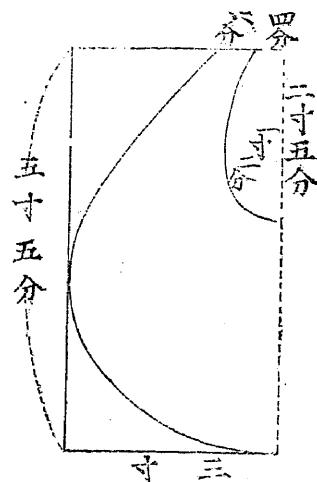
り從來用ひ來りしものは、其地質の撰び方縫方共に粧飾を主とし、体裁はよろしけれども洗濯に適せざるもの多かり。今左に最も能短なる涎掛けの裁方、縫方につけ一二三を記すべし。又其地質はキヤラコ或はフランチル等の如き度々洗濯なし得るもの可とす。

#### 一、縫方

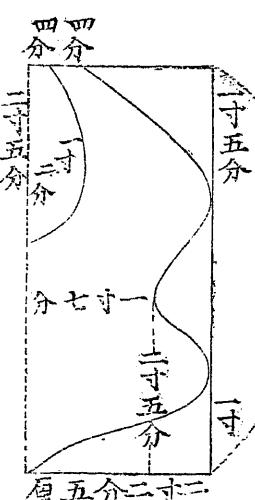
先づ廻りに着く所のギヤタを作り置く、即ち其切裁目なれば一寸裁切、耳ならば八分裁切位の幅にて、長さは其廻りの一倍半以上二倍位までの長さに裁ち置き、之を廻り丈に縫ひつめて「ギヤダ」となす。次に表を「キヤラコ」などにてなす時は、晒木綿或は綿フランチルなどを心となし、先づ表にとぢつけ置き、次にギヤダを表と裏との間にさみ、中より小さく縫ひ、表に

方ちた

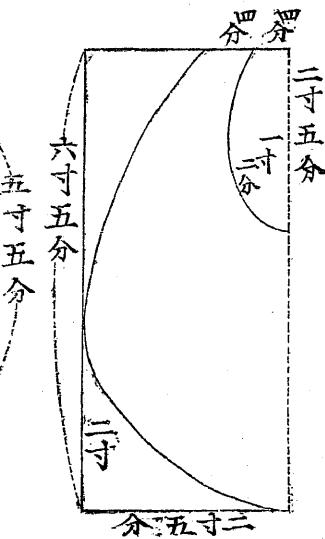
第三圖 第一



第二圖 第一

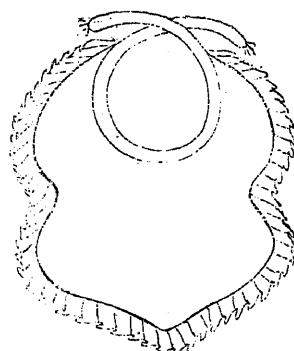


第一圖 第一

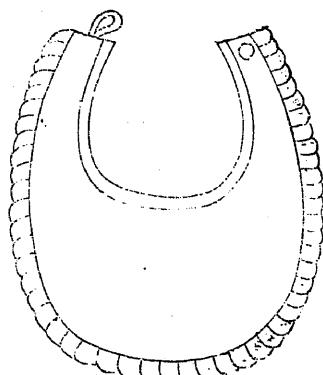


出來上りの圖

第一圖 第二



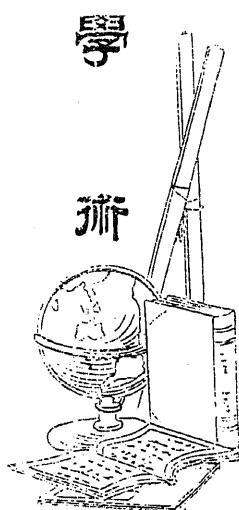
第二圖 第三



引返し、其所にミシンを掛くるなり。(ミシンを  
使用し能はざるときは返し針にてもよろし) 次  
に紐付をなす、紐は長さ凡そ一尺八寸位となし  
「テップ」或は共切を用ふるなり。又第二圖の如  
く紐の中に綿を少しこれ置き細く縮け置くもよ  
し。又第三圖の如く廻りは「ギャダ」となさず、  
普通の「ヒダ」となし、紐付の所も、紐となさず、  
鉗掛になすもよし。又ミシンを使用し得るもの  
は其中に種々の模様を縫ひ、或は其形を梅花  
櫻花などの如く裁ち、中央に蕊り如く縫模様  
をなし廻りには「ギャダ」或はヒダを付けず、ケ  
ベレにてふちを取り置くも亦をもしろし。

## らんぶの話

## 京都圖南子



炎帝酷吏も何れにか姿を匿し、南窓孤燈の下心  
靜かに書を繙くに快き時節に近きましたが、さ  
てこの際吾人が恩澤に浴するものは燈火であります  
せう。皆様の宅にては或は電氣燈或は瓦斯燈等を  
使用せらるゝ方もありませうけれども、先づ普通  
に使用せられるのはらんぶですから、これにつき  
て御話をしませう。

らんぶを取つてよく見て御覽なさい、下方から始めますれば台油壺の心、口金はや、かさ等があります。さてこれ等の各部は如何なる効用をなすものであるか、油壺には娘等の知らる、如く燃すべき油がありますが、油は毛細管引力の作用によりて心中に上昇します、毛細管引力のことば他日に譲りまして心のことに移りますと、心には通常平心丸心等がありまして共に油の浸み易き木綿糸にて作られこれを上下するにはねじを用ゐることも御存じの通りです。

口金のことが終りましたから、これよりはやに進みましょう。ほやは如何なる効用ありやと問はば、必ず光明を増し且つ風の爲めに煽い動くことを防ぐ用をなすと答へらるゝでしようが何故に光明を増すかと反問せば一寸答に窮せらるゝ方もありましよう、さて已に引火せる物質の燃焼を盛ならしめんとせば、如何にせは宜しきかと云ふに、空氣中の酸素が燃焼に必要であると云ふことは皆さん御承知でありましょうけれども、この酸素は間断なく燃焼の爲めに費されます、からして

次に口金を觀察して御覽なさい、その下部には多數の小孔の存するに氣付かれましよう。抑も何故にこの小孔を設けたるかと云ふに、試みに手又は手拭にてこれ等の小孔を塞きなば如何なる現象か起りますか、燈光次第に幽晦となり遂に消滅

燃燒を持續せんと思はゞ絶にすこれを供給するこ  
とが必要であります。夫れ故に絶にす新らしき空  
氣を供給する爲めには、らんぶの心の燃えつゝあ  
る部分を圍める空氣を交換する必要が起りましょ  
う。而して氣体は熱せらるれば熱せられぬ時より  
軽くありますから其浮騰性を利用せば、この目的的  
が達し得られましょう。故にはやや加ふれば空氣  
の交換が完全に行はれて燃燒が充分となります。  
燃燒が充分となりますれば、烟の温度は上りて烟  
の中に浮遊しつゝある炭素の微小粒が強く熱せら  
れて急に光明の度を増すのであります。即ち炭  
素の微小粒が強く熱せられまして光る様になりま  
すから、ほやを加ふれば煤煙の上昇する少  
くなるのであります、これはよく目撃せらるる所  
であります。要するにはやは燃えつゝある心

の周圍にある空氣の交換を完全ならしめて燃燒を  
充分にし烟の中に浮游せる炭素の微小粒をして強  
く熱せられて光明の度を増すの効用をなすので  
あります。

かさはらんぶの光りを四方八面に散らさずして  
これを必要な場所に集めて光明の度を増す作  
用をします。

ランプ各部分の効用も終りましたから、これよ  
りこれに使用する油の話に移りましやう、即油  
は石油を用ふることは言はずとも知らるゝであろ  
う、この石油は古代生物の遺体が種々分解して其  
揮發分が溜集したる所の不純なるものを地中より  
汲み取りて精製したるものであります。日本にて  
は越後遠江等より湧出しますけれども、多くは  
外國より輸入するのです、この石油を汲み取る所

では地中に五百尺乃至六百尺の井戸を穿り、ポンプを以て汲み取りてこれを槽に集めます、この地中より汲み取れるものは其質も粗惡且つ不快なる臭氣ありて實用に供することを得ざる暗黒色の粘液であります故にこれに蒸溜法を施してこれを分離するのであります。

## 揮發油

三十度—百五十度(沸騰點)

## 燈用石油

百五十度—三百度(〃)

## 重石油

三百度—三百七十五度(〃)

右の如く沸騰點の差異を基として三種に分別ま

す。而して右の如くに命名するのであります。何

故沸騰點が三十度—一百五十度のものが燈用に供す

ることか出來ぬから云ふと、元來石油等に火を移

し易きは其表面より絶えず發出する蒸氣が空氣と

混じて居る故であります。その分量によりて火ひ

の移る難易の度も定まるのであります、而してこの發出する蒸氣の量は溫度の上昇によりて増加するものであります。即一旦ランプを吹き消して二度目に點火するに初度より容易なるはこの理であります。さて沸騰點の低いものは高いものに比すれば、通常の溫度に於てその表面より發出する蒸氣の量が遙に多いのでありますから、斯様なる沸騰點の低きものは引火し易くて危險であります故に燈用に供することは出來ません。又沸騰點の高いものはその表面より發出する蒸氣の量が少くありますから危險はありませんけれども、粘性多く燈心に由りて上昇する事能はさればこれ亦燈用に供することは出來ません、故に百五十度—三百度の沸騰點を有するものを取りて燈用に供するのであります。火止石油と云ふはこの燈用石油の中

にて沸騰點の高き部分を集めたるものと云ふのであります。

今度はその焰につきて一言しましやう、机前ランプ等に點火して御覽なさい只漠然とこれを見れば單に光輝ある一團と見ゆるのみでありましようが、少しく注意して見ますれば心に近接して黒色を帶ぶる部分、これを圍める光輝ある部分その外圍にある光輝の薄い部分の三部分より成ることが認められましやう。一を未燃部又焰心、二を内焰、三を外焰とは云ふのであります。この未燃部と云ふのは石油の表面より發出せる蒸氣の集まりて將さに燃焼を初めんとする所でありまして、其光輝は薄く溫度は最も低き所であります。この未燃部の蒸氣か内焰に入れば多少空氣と混合しますけれども、燃焼を完ふすることは出來ませずして、

其幾部分は分解して炭素を游離します。この炭素が強く熱せられて光を發射するのです。故に内焰は光輝の最もつよき所です。然し燃焼は充分でありませんから其温度は甚だ高くなります。更に外焰に至れば發生せる蒸氣及び炭素は充分に空氣の供給を得て燃焼は完全に行はれ温度は最も高くありますけれども、游離せる炭素の微粒の強く熱せられたるものは存在しませんから、光輝は極めて微かであります。

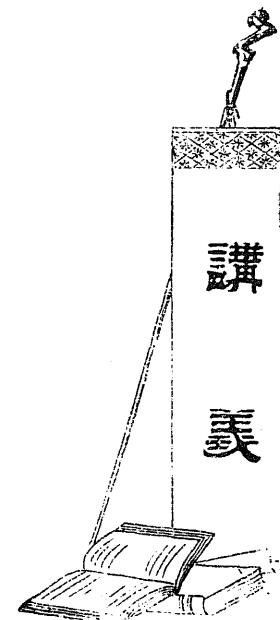
太略各部分の特性も済みましたからランプの取扱につき一言して御話を終りましよう。新聞紙等を見ればらんぶより火災の起りし例は少くありませんから、其的には皆注意せらるゝであります。ようけれども消燈の時の注意は知らずに居らるゝ人もありましやう消燈の時にランプを吹き消せば

惡臭ある瓦斯の心より發出することは隨分目撃せらるるあります。この瓦斯の性質等は餘り長くなりますが、今度は措さますが、この瓦斯は人肺に有毒です、故に消燈のときは急に吸き消すことなく、次第に火を小にして自然に消ゆる様にして消すことが最も肝要であります。

る感覚であります。此感覚は、胎兒の間からあるであらうとの説であります。何故ならば、母体と児体は觸接して居りますから、此時分から觸覚が發達して居るであらうといふのです。

今より五十年前獨逸のハイデルベルヒの醫クスマール氏が、生れたての兒二十七人に付て、生れたての時の感覚を實驗されました、氏の實驗は次の通りです。即ち兩端の圓くなつて居る硝子の棒を、兒の舌に觸れると、其觸れる場所に由て其兒の様子がちがひます。即ち棒を舌の上前方に触れると、舌は兩端からまくれ上がり棒に吸ひ付く様な風になり、又舌の下後の方に触れると、舌をのばし口を開けます。

## 兒童研究法 文學士 松本孝次郎講演



觸覺は、外物に觸れて、觸れたといふことを知

を見ると、確かに生れたてから觸覺がある、といふ

ことが分ります。氏の説によると生れたての児の触覺の最も鋭いのは上下の唇であらう。何故ならば、どんな物でも唇にさはると直に吸ひます。又小兒は一二才から手を吸ひます、玩具でも吸ひます。之は触覺の鋭敏な所に持て行て、其物がどんなものであるかを知らうとするのであります。即ち盲人が或物に觸れて、触覺に由てそれが何物であるかといふことを知るのと、同じ様な譯であります。又氏は小兒の小さい時は、睫が触覺よりよく眼を保護すると言はれました。氏は紙を細く巻いて口にくはへ小兒の皮膚に呼氣をかけると他の所よりも睫の所に呼氣をかけた時に直ぐ感じて瞬きをする又ガラス棒を角膜に触れても瞬をしないのに、睫に一寸でも触れると直に瞬をす。そうすると睫は触覺を以て眼を保護するもの

であります。丁度昆虫の触鬚のやうなはたらきをします。又氏は月足らずの児（八ヶ月位）でも、生れたてに触覚がある。之を見ても胎内で已に触覚があるといふことが分ると言はれました。

#### 触覚の研究上注意すべき事

通常小兒は鼻の兩側面中いづれか一方に触れるゝと、其側の眼を閉ざるものであります。そうしてもし鼻頭に触れらるゝ時は、兩眼を閉ざるものであります。之に反して鼻頭をたゝき、又は唇をたゝく時は屢々大に眼を開くものです。初め小兒の皮膚に堅く尖りた鉛筆を触れても之に感じない、そうして何時頃から、かゝる触覺に對する運動がはじまるものか。

小兒は初ある触覺に對しては只泣き叫ぶのみであるが、後になると防禦的の運動をするやうにな

る。そうして之等は何時頃よりはじまるか。幼兒は、額、鼻又は頬に觸れらるゝ時は、睡て居つて、も醒めるか。又はどんな運動もせずに睡て居るか

羽を唇に觸れると、幼兒は之に應する運動をするものであります、そうして此際どんな運動をするか。もし小兒の好みの刺戟を與へらるゝと頭を他に轉ずるやうになる、かゝる舉動は何時頃よりはじまるものか。跛に觸るゝと足の指をのばすか。又は足を屈するか。手の表面に觸るゝと手を閉づるや如何、又之を睡眠中に試みると、どんな結果があるか。又年齢と共にかゝる事柄に付ては、如何なる變化があるか。

### 觸覺の教育上注意すべき事

觸覺は物体の性質を認むるのに益があります。

ですからなるべく發達させなければなりません。

盲人が觸覺が鋭敏であるのは、全く練習に由るのでありますから、普通の人でも練習すれば鋭敏になるものであります。

觸覺の如何に由て、精神の疲勞の度を知ることができます。即ち兒童は、學科の種類、時刻等に由て其疲れ方がちがひます。此疲れ方を、觸覺で試験することができます。即ち兩脚規の兩脚をひろげて、身體の或部分に触れると其觸れて居る處は二點であるのに、一點と感ずることがあります。此場合に段々コンバスの兩脚をひろげて、確に二點であることを感覺した處にしるしをつけ置いて、一時間の學科をしたあとで、前の通り同じ所で試して見ても、正しく二點と感することはできません。

學校が七時にはじまる時は、七時から八時の間

はほんやりして居る兒が澤山あります。之は遠方

から來るためのもあります。朝早くから起きて、睡眠不足のためのもあります。之は觸覺の試験でよく分ります。ですからあまり遠方の學校に通はせたり、又學校が朝あまり早く授業をはじめたりするにはよくありません。このやうな場合には、

八時と九時の間が、七時と八時の間よりも、却て精神が活潑なものでありますから、第一時には第二時よりも容易な學科を課するのがよろしい。又最も疲れるのは四時間目位であります。ですから此時も易い學科を課する方がよろしい。そして其後はいよいよ疲れることが甚しいかといふに決してそうではありません。五時間目位には勢力を恢復することが常であります。そうして神經は、割合に筋よりも疲れにくいものであります。

## 温覺

此感覺は胎兒の内よりあるといふ説が多くあります、即ち母体の或部分が冷えると胎兒は運動する。又分娩せられて冷氣に觸れた時には、直に色が變り、泣き、又直に湯にて温を與へると、赤くなるのを見ても分ります。

## 温覺の研究上注意すべき事

あまり冷たき水か又はあまり熱き湯で沐浴せらるゝと不快の様子をあらはすのは何時頃よりはあるか。又其溫度を精密に記しておくのがよろしい。

凡そどんな溫度からどんな溫度に至るまでの間が、小兒の最初の生活中快感の有様をあらはすか、小兒は、あまり温き牛乳、又はあまり冷たき牛乳を飲ませると泣くことがあるか。又温き

フランセルを着せると泣くか。どんな温度の牛乳を好むか。其温度を確定するがよろしい。又冷たき物に触れた時に、其顔に變化をあらはすのは、何時頃よりはじまるか。小兒は屢々手足の冷たきに拘らず、不快の様子をあらはさぬものです、かういふことは、ひどく手足の冷たい場合でもさうであるか。

さらされて遊ぶものですから、何時でも適當な温度の處に置くといふことはできません。ですから寒氣に堪へ得るだけに、皮膚を鍛練しなければなりません。之には冷水浴がよろしい。又少し大きくなれば、游泳がよろしい。ニューヨークでは、游泳が盛で町々に游泳場の設があります。

游泳は皮膚の爲、れよき方、海事思想などの諸點に効があります。日本では用心深くてあまり獎勵しませんが、之は適當にはげましたいものであります。

温覺の教育上注意すべき事  
之は幼兒の發育上注意すべきことであります。外國では、學校に湯を設けて、生徒に入浴させる計畫もあるが之は管理上では随分大らしいことです。が併し要するに兒童の皮膚を清潔にし、皮膚病を防ぎ、排泄の作用をよくし、皮膚を強くします。

氣候の變遷に侵されぬやうにするといふことは必要であります。一体兒童は活潑なもので、寒氣に





## ヴィクトリア女皇の傳

(つづき)

### 鄭越生補譯

斯くの如く、女皇には母君侯爵夫人の注意深き且つ熱心なる御教育によりて、十分見事に御成人あそばしましたが、行く末は大英國の皇位を踐ませ給ふといふ尊き果報を備へさせ給ふ御身分なることは、女皇御自身は申すに及ばず母君さへ露御考へなさらなかつた事でござります。勿論女皇が御即位わらせらるゝやう機運のすみましたのは一千八百三十年（ジョーダ四世王御崩去なされウ

イリアム四世王のつぎて御位に上らせられたる年）以後のことでありますので、夫れ以前には去る御考へのあるべき筈もなく、むしろ一向ざる御希望のないのが當然であります。

しかるに女皇の御教育が、時の皇族方の御教育と普通外れて居りましたので、夙に母君侯爵夫人の御胸中には女皇將來の御運命を充分洞見せられて居たまひしかの如く云ひなす人々もござりますが、何れも思ひすぎた説でその間違なることは明かなることであります。

殊にスコット氏の如きは、一千八百二十八年其の主宰せる雑誌に女皇當時の御有様を記載してしまつり、やがて帝位に上らせらるべき尊き御身分なるがゆゑに、と云ふ言語は此の頃女皇を鼓舞し獎勵したてまつるために絶えず用ひられた警語で

あつたと云つてありまして、女皇御自身にも早くこの運命を知られて居たまひしやうに申して居りますが、是れ一層甚だしき誤謬で、前にも申した通り一千八百三十年以後次第に時運が女皇に幸したので、夫れより二年以前なる一千八百二十八年に、かゝる御思召が女皇にあるべき理由がないのは明かでござります。

女皇が御自身に御身分の皇位に近きことを御發見になりました時のことにつきては、極めて興味ある御咄しが、レーゼン男爵夫人の備忘録によつて傳はりて居ります。

その備忘録によれば、男爵夫人が女皇に英國史系譜表を御覽になりて居られましたが、圖らず御教授申しあげしと、女皇には癡心英國帝室身分の尊しさを見出しましたまひ

今まで斯様な書物は見なかつた、私は思ひの外皇位に近き身分なりし

と、矢庭に聲高く仰せられましたが、やがて

皇位は尊きものである、併し尊きだけ夫れだけ責任が重大である、私は善良なるひとならなければなりません、諸種の學科に勉勵せねばならぬ、ラテン語も一層精をいだして勉めねばなりませんまい、なぜなればラテン語は英語の基礎であり、莊嚴なる發表には是非とも必要であるといふゆゑに、叔母様のアウグストさまやメレさまは御稽古なさらぬけれども、私は學はねばなりません、

と長大息とともに仰せられました、そこで男爵夫人は

人は

併しアテレード（現帝ウイリアム四世の皇后）はまだ御齡若くあらせられますから、此ののち御慶事が御ありなさらないものではございません

多分は御皇子方が御出産なさるであります、その時は勿論その御皇子が御位に即かせらるゝであります。

と申しあげますと女皇にはもしそうあつても私は失望しません、その皇子が即位するのは常典だから、と仰せられたと書いてありますのが的確に是が女皇の初めて御自身に御身分を知りたまひし時であつたのでございませう。

御幼年ながら女皇には深くこの事實を御胸中に銘じたまひ、學をいそみ、德を樹て、ひたすら御身を重んじ、やがては十全の天子となり幾百万

限りなき衆庶の尊敬を受けさすべき尊き身分なりと、いふことは瞬時しば女皇の念頭ゆくうを去らなかつたやうであります。

カロリン、コックス氏の語るところによれば、女皇には或る日英國史を朗讀せられて居られましたが、カーロット女王殿下御薨去の條にいたり、急に同女王が皇太女に冊立じゆだいられた事實より、將に女皇自身の上に來らんとする事實に想到し、卷を掩うて

若し此の女王の如く繼嗣けいしに冊立せらるゝ事の我が身に現實じゆじり來らばと母君に御尋ねになつた、母君の御挨拶あいさつせらるゝ善良なる婦人よしわらわとならんければならぬ、善良なる婦人は則ち善良なる女皇であるであらう

またダヒス博士の子息の云ふ處によれば、博士が  
或日女皇に英國の帝王表を列記せしめた、その時  
女皇には伯父ウイリアム四世王まで書き列ねまし  
た、博士は、それを見て

この次に帝位に即くべき人の名を御書きなさい  
と申し上げますと、女皇は嬌羞ながら

自身の名を書くは變だから

と仰せられましたと云つてあります、コツクス  
氏の物語といひ、ダヒス氏の物語といひ、何につ  
け彼につけ女皇が常に御身分の尊きことを御忘れ  
なく、如何にも既に女皇になられ給ひしかの如く  
御思召されて居らせらるゝ事はよく了解ります。

(未完)

## 桿の露

## 文苑

### 東京秋影生

人の嘆も七十五日とやら、兎角人間は忘れ易い  
もので有る、容赦なく過去を葬り行くタイムの進  
につれて、新しい問題が湧いて來ると反比例に、  
過去の記憶はその彩色が褪めて曇げになつて仕舞  
ふが、此處に年々新なる記憶となつて寧ろ其明瞭  
の度を増して繰りかへされ、恐らく我には終生忘  
れることの出來ないのは、わが亡き母君の事であ  
る。

母君の亡くなられたは、わが十三の時で、其時

は只もう夢の様な心地、母君は遠い國に旅立たれ  
たとてやがてはふ歸りなさるであらう、この幼い  
我を置いてけぼりにしてあの慈愛深い母君が何處  
へ往て仕舞ふものか信じて居た。我はまだ死と  
いふとの解釋を知らなかつたのである、がそれは  
空だのみで有た、翌年の宇蘭益會に、今日は母君  
の歸るぞよどいはれた父上のふ言葉に我は如何に  
喜んだらう、茄子や胡瓜の馬を巧にこしらへて逸  
早くお迎へに往た時はいかに勇んで有たらう、が  
それは現し身の此世の人でなく、御魂のみで有る  
と知て、いかに失望したであらう、消氣かへつて  
寺の門を出る時の姿がどんなにいちらしかつたら  
う。あゝ母君は永く歸らるゝとはないのである  
か、あの慈愛深い母君は何故幼い我をおいてけば  
りにして遠い處へ往かれたのであらうと考へた

が、此時われは死といふもの、慘酷などを始めて  
知たのである、死は人の生命を奪ふものである、  
死の手にとらへられては再び此世に歸て來られぬ  
といふと悟つたので有た、あゝわが母君は死な  
れたので有るか。

爾來十年、我は遂に暖かき家庭に入る事が出來  
ぬ様になつた、母なき家庭のどんなに淋しいか、  
蜻蛉つりに日を暮らして歸る薄闇の門の戸に倚て  
待てる人はない、丁年を超えた今日なほ母様と  
お膝にすがつて甘へてみたいとてそれも叶はぬ、  
女々しいと人は笑ふであらうが、野を分けすぐる  
秋風さら〳〵と、黍煙を搖かし柿紅葉を振うて小  
雀を追いやく彼方、あか〳〵と西に入る日を眺め  
て立てば、凭るべく温き懷を持たぬ私は、淋し  
さの餘り涙落さずには居られぬ、況して江湖流寓

の身となりて、壁一重隣りも吳越の情ある都人の間に處し、人のなさけは塗り白粉の、只うはべばかりの世の様をみては、如何してわが慈愛ふかい母君を想ひ起さずに居られやうぞ、されど噫、わが母君はかへらぬ人となられたのだ。

われは母君に就て多くを語ることを好み、十三までの腕白さかり、母君の御心勞も思はずに我は我儘に送たのである、今からかもへば勿体ない程で、わが落魄の父上を賚けて四方に流寓し、傍ら我を鞠育された母君の御心勞は如何ばかりで有たらう、私は數々木枯吹きすさびて燈火冴ゆる冬の夜すがら、賃仕事の針を動かして居られた母君を見たをがある、若からぬども女は之が身だしなみの髪なども自分で結はれる、髪結の手をかゑるとは滅多にない、あゝ我是知らなんだ、我が日々

の小遣錢がいかにして母君の財布の中に盡きぬか、お祭の揃の浴衣や提灯が如何にして作らるゝかを、況して櫃中の米と俎上の肉とが幾何の價を要するかに就ては一向無頓着で有たのだ、峭直人に屈せぬ父上（父上は至つて頭の大きい方で出来合の帽子は被れぬ程であるそこで「大頭小さい帽子被りかね」と洒落られたともあつた、今に我的猶介狂峭人に容れられぬ性質を憂ひて、遺傳といへ處世の路を誤る基、ノイで乃父の轍をふむ勿れと戒めらるゝとも度々である）が、世に容られず世に背き、一家を擧げて故山に歸耕するととなつてからは、母君は邸内に桑畠の有るのを幸ひ、養蚕を始め、殆んど夜の目も寝ずにその世話をなされた、其時も我是桑をされとの吩咐に背いて逃げ隠れ、氣儘の遊びに耽たとも有た母君の御丹精

で美くしく出来上つた繭を、やがては絲にしてそ  
なたの祝衣などお喜びで有たが噠何事も夢、誰  
かその繭が金にかへられて御身を葬る費用になら  
うとはふもひかけやうぞ、實に母君は年來の心勞  
にいたく健康を害したのが、此時一時に發し、ふ  
と床に就かれたのが重つて、四十三歳を一期に遂  
にかへらぬ人となられたのである、慈愛深きその  
面影を一葉の寫眞にとらめて。

噫なつかしき母君よ、今一度わが頭を撫でて大  
きうなつたと云つて欲しい、母君眠いとれ膝に甘  
へてみたい、子供らしいと笑はるゝであらうか、  
われは子供にかへりたいので有る、母君の此世に  
居られた子供の時に歸りたいので有る、なまじ年  
を重ねて細ざに嘗むる世の人の、辛き情をうらみ  
わびては袖に涙の、かゝる時母君の在さばど、千

年みるとも物いはぬ寫眞を抱いて夕日沈む野邊に  
不むだとも幾度か。縊々として千秋つきやらぬ別  
恨は風朝雨夜、紀念の寫眞にそぐ涙年毎に増り  
てあゝ今には兒女の愁にかへりて慟哭を禁する  
をえなさぬ。桟の露の一秉、硯にうけてかきつ  
くるはかなしきさも、せめては心やりのすさびて  
有る。

### 細川忠興夫人

東京 森岡 たけ子

身を守ること、雪中を犯して清香を放つ梅花の  
ごとく、霜雪を凌ぎて其の色を改めざる松柏のご  
とくにして、節操堅固なる大丈夫も及ぶべからず。  
我國貞女烈婦も數多ある中に、わけて、芳名高き  
は誰ぞや、細川忠興の夫人こそ、眞に其人なれ。

いまいさゝか、夫人の行ひさまにつきて述ふると  
ころあらんとす。

さて、夫人は明智光秀の女にして、細川氏に嫁し其室となるや、家を守りて夫に内顧の憂なからしめ、老を老どし、幼をたづさへ、其道を露あやまることがなかりき。

かの石田三成の衆、邸を數重にかこみて矢砲は競發するまゝに、夫人は日頃敬ひ仕ふる老母をして難を避けしめ、且かなしくせる兩人の兒等をよび、その頭をなで、「汝等よく我言をつゝみて聞けよ武士の家に生れたらんには事にあたりて死すべし。死せざればかへりて辱を受く。今敵已に迫れり。吾汝等と共に死せんとす。汝等怖るゝなれど」といとねもごろにさどし、やかて匕首を抜き、これをさし殺せり。時に男の子は僅に十歳

にして、女子は八歳なり。又侍女に命じて暑衣を取らしめ、面をつゝみていはく、婦は夫婦にわざれば人をして顔を見せしむべからずと忽ち自殺す。其臣松齋火を放ちて、邸を焼き、乳母二人と侍女は盛炎中に投死し、從臣もまた自殺す、三成これをきゝて、ふとろき、ふもへらく諸侯の夫人かくのことくならんには是れ徳川氏のために諸侯をかりて之に歸せしむるなりと、事遂に止むを得、従て列侯の夫人も免るゝことを得たり。忠興變をきゝ、又其絶命の詞を見てかなしみ惜ること甚し。遂に東照公に従ひ先鋒となり、三成と關原に戦ひ、大にこれを敗る。東照公其功を歎賞し、熊本五十万石にまし封じたまひき、これ唯忠興の功ありしのみならず、夫人の死節の烈の高かりしによれるなるべし、あゝこの夫人の節義と、夫人の

貞操の高きと世の人もてはやしてやまざるもまた宣なる哉宣なる哉。

## 蘆湖紀行

### 東京和歌子

地圖を披きて箱根山頂に蘆湖あるを見、寫眞石版を見て、芙蓉の峯の湖上に倒立せるこれぞ箱根の倒富士よ、など人の語るを聞くごとに、いかで一度はかかる勝をたづねばや、とはれのれ年頃の願なりき。さるを今年の夏うれしくも其望はみたされぬ。いでや蘆の湖のために其勝を語らんか。

八月それ日の朝とく起きいで、登山の用意し、七時同行五人と共に箱根底倉なるやどり梅屋をいづ。駕に乗りてなり。生れてはじめてかどいふものに乗ること一、めづらしくふもしろし。宿の

主人とかごより懇にのりかたを教へられて、からうじてかゝみ入る。友はと見ればはやうたくみに乗りて、かつて上げられたり。たもはず顔打見合にして笑ふほど、たのれの駕も宙に上りぬ。かくて六挺の駕は一すちになりて蘆湖に向ふ。かごや、けふは雨ならん、などいふに、箱根の山奥に雨にあふ又れもしろからずや、などいひくゆられへて行く。進むに從て霧起る。雜木の繁茂せる坂路を登り行くこと、十餘丁にして小湧谷をよぎる。こゝは七湯以外の新温泉場にして、海面をぬくこと凡そ一千七百四十尺といふ。

小湧谷を経て進み行くに、道によくけはしく霧ますます深し。登るに從て暑さを忘る。げに箱根八里の歌にあるがどく、雲は山をめぐり、霧は谷をとおし、羊腸の小徑は昔消なり。いはゆる

万丈の山千仞の谷のあたりわれらに箱根の險を示しがはなるいといさまし。雲霧深ければ遠くは見えず、來りてはじめてそこに道あり谷あるを知るのみ。さながら雲をわけて天上に登るがごとし。世はなれしこゝちこそすれ箱根山雲居る中を

わけつゝ行けは

されどまを世をはなれしにはあらざりけり。小湧谷をいで、十餘丁にして、池尻といふ處に至れば、世の中めきたる茶店あり。かゝる山中にも住む人はありけり、とぞねばえし。即ちこゝに休息す。駕に乗りて以來はじめて顔を合せたれば、友どちと道々のことなどかたりあふ。

池尻にしばしやすみて、かごや又息枕とりあげぬ。はたして小雨ふりいでたり。雨の箱根またよし。たゞかごやのぬるゝが氣の毒なり。十丁ばかり

りけはしきところをのぼりへ、雨と霧と草とにうちもれつゝ行けば蘆の湯に達す。こゝは七湯中最も高處にありて、海面をぬくこと凡そ二千七百六十尺といふ。げにも肌寒きばかりなり。おはれくも登りけるかな。

蘆の湯をよぎりて、又苔滑なるけはしき路を登ること二十餘丁にして元箱根に至るべし。此間に名所多し。

曾我兄弟の墓 蘆の湯よりゆくこと五六丁、道の左小笠の中に、大なる二基の石塔あり。これら兄弟の墓。傍に小さながあるは虎の墓なり、とかごや鼻うごめかす。

多田滿仲の墓 道の右にあり、此奥にといふ木標のみを見てよぎる。こゝでは錢なしでも饅頭が買へる、とかごや笑ふ。地下の満仲何とか

きくらん。

只ゆかしがりて過ぎぬ。 (つぐく)

精進池 こゝとはさけど霧深くして水少しも

見えず。

石地藏 道の左側に高さ一丈餘の自然石にさ

ざめる地藏様の座像なり。脅には大岩石を負ひたまへり。これぞ弘法大師様の御作、とかごやの鼻また高し。

御狀石 五圍ばかりもやあらん高六尺ばかりの石なり。頼朝公が山中歴遊の時書狀を見られしどころとぞ。

二子茶屋 山上に只ひとり、さみしくもをして立ちする掛茶屋なり。晴れたらんには、蘆湖頭にそびゆる塔ヶ島の離宮を望み、二子山の麓にある霧池を見下し眺望佳なり、ときけど、けふは霧深ければそれかと思ふものも見えず。

## 幼稚園

東京 小島 たつ子

雪には、えむ梅が香も霜にふじるといふ菊の花も、二葉の初めより心して培ひてこそ、一しほ色も香もめでたけれ。かよわき二葉い嫩芽のいつくしみ養はるゝことなくば、いかで雪霜にたふるはまれを得るに至るべき。あはれ非情の草木すら、然るを、まして情あり、しかも萬物の靈たる人をおほしたつるにふいておや。されども、世には、時に或は無智にしてさる心得なき親、また或は一家の事しげさまゝに心ならざる親などありて、このひとも心を用ふべき、忽がせにすべからざる幼児教育の行はれざる家庭の多きをもて、こを憂

ふるの結果、此業を専門とする公のまとむ、いで  
来るに至りしなり。夙にフレベル氏の立てられし  
幼稚の園といへるは、ひとへにこれがために創め  
られし庭とこそ、傳ふめれ、

そも幼稚園とはかゝる必要によりて未だ學齡に  
達せざる幼兒の爲に設立せられし者なれば、其目  
的とするところは能く各兒の天性に従ひよがをす  
め、あしきをかけ、専らすなほに生ひたてしむ

るにあり、されば唱歌、遊嬉、手細工、など幼な  
ごろを導くにふさはしくして、しかも益あるく  
さくの手だてをつくせり。

又明らけき今の大御代は我國にも其必要成功を  
悟れる者多く、近年頓に其設立増加し、従つて此  
處につとへる幼兒の數もあげて數々からざるに  
至れり。然りといへども、なほ此精神を誤解し

或は、幼兒を學ばしむる處なりとおもひとれるに  
や、幼兒の自由動作に害なりとさへいふ者もある  
は幼稚園のためには、いみじき冤にして實に幼稚  
園は幼兒の爲には樂しき園生、安全なる園生自由  
なる園生にこそはあれ。あはれ、かゝるめでたき園  
生につとひ得る幼兒の幸こそまたたぐひなけれ。

### 公德唱歌（其一）

#### 學校の詩人

物理の試験面白や

生きたる蝶々瓶に入れ  
空氣をぬけば動かれず  
前なる人よ立つ勿れ  
後の人も見ゆるやう

試験は誰も見たきなり

生きたる蝶々瓶に入れ  
空氣をさせば飛が廻る  
前なる人よ立つ勿れ  
後の人も見ゆるやう

運動會の面白さ

白と赤との綱引や

勇氣をだせば取返へし

勇氣撓めば引ずらる

前なる人よ立つ勿れ 後の者も見ゆるやう  
 勝負は誰も見たきなり

庭にうゑたる梅さくら 根方をふむな技折るな  
 花の兄なる梅の花 花の姉なる櫻花

唉きたる下に手をひきて皆諸共に遊ばなん  
 皆諸共に樂しまん

---

海邊の夕ぐれ いざり火

夕日落ち行く海の末 オレンジ匂ふくもの色  
 涙のうね／＼影うすし 沖よりふくるす、風を  
 軽き袂にはらませて をちこちあさる瀬傳ひ  
 貝拾ふ子も今は去りて 汀の小いしからふなみ  
 磯馴松の枝のうなり 調べおかしく聞ゆなり

潮路も見えぬ夕霧に 見えみ見にすみ薄くこく  
 海をあやごる島山を 見いる向ふの岩かげに

小舟掉さし父も子も うたう船うた勇ましく  
 浪のまにまに聞ゆなり うちの苦屋に只ひとり  
 我脊我子の歸る路を 照さんとてか焚く松明も  
 海には家路急ぐ父と子 くがにはみなち思ふ母  
 かたみに寫す暮の色 打見るはま邊染なせり  
 日は暮れに島海は暮し 月は未だ出ぬ宵やみの  
 岩打つ浪も音すぐ 吹き來る風の身にぞしむ

---

友に別るとて 東条子

今宵別れの思ひ出と 君がかなつるキオリンの  
 系の調は絶ゆるとも 名残はつゝじとこしへに

月かけ 小林恒子

涙はらひてのる船の けふうもくろき海の上に

おくれがちなる十六夜の

あはれ月のみさえわたる

松風やましらの聲を友として

五十

故郷の友

同人

水

全人

浪風の立たぬぞ御代の姿なる

臣に譬し水にありせば

山里の月

高木まつ子

妻戀ふる鹿のなく音に夢さめて

檜原の月をひとり見るかな

あられふる朝  
鳥のなく音に  
うれしき事や  
ま垣もなくて  
我がふる郷の  
友三人



初秋の風

布士の舍主人

天の河さやかに見えてはしなくも

身にしみ渡る秋の初風

秋の山家

歸省して踊を見るや三年目

蕎麥白き晶や夕日赤蜻蛉

涼月子溝侏圓旭聽

盆の月桐の葉越に澄めるかな  
緋數尾芒にさして歸るかな

鳴たつた沼の夕や月淒し

月天心街の踊盛なる

睡月侏圓旭聽

稻妻や城樓の 魁 天を突く

松 軒

神軍の魔隊を破る野分かな

芝 水

賜のなく戴のあなたや夕榮す

杏 子

星逢ふ夜桔梗は既に苦みけり

郊 外



## 説 林

口は幸ひの基

高木四郎

世に口は「禍ひの基」といふ諺があるから、此

處に「幸ひ」とあるのを、活字の誤植だなど思ふ人もあるか知らぬが、さうでない事は前號に母の

言葉と題して、言つておいたのを見た人は知つて居らう、又さうでなくても、何と口は「幸ひの基」で

はなからうか。物を食ふも口、物を言ふも口、食はなければ死ぬ、言はなければ仕事が運ばぬ。又

いくら口を使へばとて口は不平をいはぬし、いくら物を食へばとて口は怒りはせぬ、尤も胃の腑で

要求もしない時、あまり澤山にかたい物でも食ふと口は疲勞を訴へて動かなくなる。然しこれは自業自得で、口の罪にする事は出來そ一もない。手

の奴足の乗り物よりは、一層吾人のため必要な此の口は、何と愛すべきものではなからうか、然るに

世はこれに向つて「禍ひの基」といふ酷なる評語を與へてある。

一軸此の「禍ひの基」といふ冷酷なる評語を此の口に與へたといふのはこれは「輕口」「饒舌」は勿論

世の一般に對して「口は恐るべきもの」といふ事を示した戒めであつて、餘程古くから名諺として我々の先祖代々傳來して、今日もなほ吾人の口頭にあらはれるが、然るに實際には「恐るべきもの」、一として忌み遠ざけて居る風が見えぬ、従つて此戒めが少しも戒めとなつて居らぬ様である。これといふは、此の戒めは、元來生々的活動主義、現世主義である、我々日本人の性格に合はない戒めであるからである。此の戒めは日本で何時時代から世俗の一般が使用し始めたかは判然せぬが、とにかく、支那の學、支那の風俗に心酔したその時代に、當世風を氣取つた紳士紳士輩が、通人を氣取つて支那の古諺を口眞似したのが基で今では日本の俗諺の様になつたのであらう。支那ではかの朱子が「禍は口より出づ」といふ諺を

引いて居るのを記憶して居るが、此のことばはその以前餘程古くからあつたらしく見える。一脉支那といふ國からは、古くから虚言つきの多い處だと見えて、「小兒婦人は口を用ゐる可らず」ともいひ、又「口は以つて食ふべく以つて言ふべからず」などとも言つて人間は食ふために世に生れ出たのであるといふ様な寢言を言つて居る、又「能く實行するものは必ず言はず、能く言ふものは必ず實行せず」などと偏狹な事を言つて居る。又「天何言哉」「寡言善行」などとも言つて、己れの前世は啞蟬であるたのだと言はねばかりである。然るに日本人は古來口に對しては、どう言ふ信念を持つて居たかと言へど、「言靈の幸はふ國」「言靈のたずくる國」などと言つて、「言葉が吾人に幸ひを與へる國風」である。「言葉は吾人の活動をたすける利器で

あるなどといつて、言葉の自由を盛んに唱へて居る。これは單に日本ばかりでない、洋の東西を問はず、國らしい國は皆此の通りであるので、少しも珍しくない、これが當然なのである。然るに、支那の學術、風俗が日本にはいつてから、我々の祖先は無言の行をまね、暨的行動をするのを無上の道徳と心得たから、口は吃り、意氣は沮喪し、大いに活動的天賦の氣性をきづつけたのである。

今でも日本の一般の漢學者は、相對して議論でもしかけると、彼は傲然として啞の眞似をするさうかと思ふと客が歸れば、忽ち筆をとつて氣焰萬丈なかく四十分の勾配を昇る漁車のそれよりは恐しい黒煙を吐く、かういふ卑劣な僞君子、擬聖人はどるに足らぬが、これらは孔孟等の大人物をはつきり見る明のない小人が、その教育を誤解

して居るので、いくら昔の支那人でも前世は啞蟬ではなかつたらしい事は、彼らの信じて居る彼の孔孟も甚だしい議論家であつたのを見てもわかる又日本人で彼の貝原益軒の様な饒舌も、なほ恭黙して道を思ふのみなどと偽つて居るではないか、う言ふ國がらの世俗を戒めた此の「禍の基」といふ諺が、元來生々主義の我が國民のために、戒めとならぬのは當然ではなからうか。

それに又此の諺が、戒めとして甚だ不合理であるといふのは、其の根底即ち立脚點が、世俗の常情といふ處に在る事である。

そは、口は吾人の生活上は勿論、處世上唯一の利器であつて、若しこの口が閉鎖されたならば社會の活動は勿論、國民の全體は血液の循環をまで止められるのである。不作の凶年に啞が出遇

つた様なもので、到底生存も處世も出來なければ  
もとより活動などいふ事は思ひもよらぬ。斯くば  
かり必要な吾人の口は、寝ても起きても、起きて  
も寝ても、しばしも吾人と離れる事をしないで、  
朝夕日夜絶えず吾人に幸ひを與へて居るのである  
事は、知れきつた事であらう。然るにこれを「禍  
の基」といふは、世俗の一般が、思ふまかせ出まか  
せに使つて、少しも言葉を愛し勞はり慎むといふ  
事がないから、そこでその慎みのないのが世の常  
であるといふ處に土台をおいてあるので、そこで  
こそ此の「戒め」が戒めとして、成立して、古來世  
俗に用ゐられて居るのであるが、これが即ち余の  
言はうと思ふ處であつて、又此の謬の起こうで  
あるらしい。

「体世の中は慎みのないものだからといつて、

直ちにその慎みのない處に土台を据ゑて、さうし  
て戒めとしようとするのは、抑々誤りであつて、  
戒めといふものは、あくまでかくあるべきもの、  
當然かくあるべきもの。といふ處に基盤をおいて  
さうしてのち悪しき處よくない處を戒めるのでな  
くてはならない。さうでないと、その悪い處即  
ち此處では、よくない社會が、その根底となつて  
居るのだから、つまりその戒めの立脚點に、よし  
や到達しても、それは「善くないその社會」までで  
それ以上に進む事は出來ないのである。然るに弱  
點の多い人間は、いかなる戒めでも、その戒めの  
根底に達せしめようが務める事は一般に對しては  
甚だ無理な要求で、甘くいつても多くはその中途  
で了はるのであるに、ましてこの世の慎みのない  
といふ處を標準としての戒めは、俗に「ヤケヲ

起コスなどいふ人間の弱點をあらはして居る言葉の盛んに用ゐられる我が國民では、支那人と違ふて、「ナンノ世ノ中ハコレガアタリマヘダ」的言葉の下に、却つて獎勵するとも決して此の「輕口」

「饒舌等」を矯正する事は出來ないといふ事が容易に割り出される。かつや又、まだ世の中といふものを探し、自然のまゝの兒童に問はれて答へようとするが、甚だ説明に苦しむので、或は潔白な

兒童の心裡に、汚れをとめる様な事になる、これでも此の諺が、神聖なる戒めでない、又戒めをして甚だ不合理なものであると言ふ事が知れるであらう。

そこで今此處に、「口は幸ひの基」といつたけれど、かういつては決して戒めにならなければ、

諺といふものでもない。然しこの「口は禍の基」

といふ消極的な戒めの存する限りは、不合理な諺のある間は、吾人は一方に、積極的な教訓、合理的な確言としてこれを特に記憶する必要があると信ずるのである。

## 寄　書

食はず嫌い

長野 飯島 八千溪

食物の好き嫌いわ、全く、我儘から來るので、一年三百六十五日、此位親に迷惑を掛け、心配させる事わありません。

そこで、私の生れ在所わ、信州の伊那で、田麥の澤山れる所で、米と麥とが、平生の食物にな

つて居りますから、皆、身體が丈夫で、山います。

所が、私の四五軒隣りに、お父さんと云ふ娘が山います。まして、其娘わ、どーも、食物に好き嫌いが有つて、特に、麥と來たら、一所に煮た御飯の香いもいやだと云ふので、お父さんが色々と心配なさるが、どーしても其娘だけは、別飯でなければ食ひませんので、其お父さんのお骨折りと、御心配とは、どんなで山いますよ。

其うちに其娘が、脚氣と胃病とに罹つて、床に就いてしまいました。サ一、そーなると、お父さんやおツ母さんの御心配わ、今迄と違つて、一層甚だしく、晝夜そばに居て、揉んだり、摩たりして居る(何と有がたいことでは山いませんか)が段々、重くなるから、お醫者さんを呼んで見て頂いたら、之わ、お麥の御飯と、赤小豆とを食べなく

てわいかんとのとで山いましたが、何に致せ、お麦わ、香いもいやだと云ふので困つて居ました。

そーすると、其翌日、お隣の叔母さんが、お見舞に来て其話を聞き、夫れなら、此隣村に、よい行者さんが有るから、其行者さんを頼んで拜んで貰つたらと云ふので、直、其行者を頼んで拜んで貰いました。所が、其晩から何の苦なしに食べられるよーになつて、忽ち病氣が直つてしましました。

後に其娘に、あの位嫌いで有つた、麥飯が、なぜあのよーに苦なしに食べられるよーになつたかと、尋ねましたら、神様の云ふ事を聞かぬと、罰があたると思つて食たら、少しも、いやでなく食べられたと云いました。如斯を食わず嫌いと云ふので、之わ、甚だ我儘な、よくないとで山います。

兒童に對する言語

東京 和田 藏子

子供と申すものは、いつも、周圍の事物によりて、熾なる探求心を満足させんといたします。此心は極めて大切なことで、漸く五官の練習を積み、觀察の力を養ひ、善美の理想を造る等、皆此心に基くといふ程であります。

すなはち子供は、稍長き說話をも能く楽しみて聽くもので、此時代に於ては、先づ他人の言語を聽き取るのを以て、基礎とするのでありますから、母保母乳母の如きは勿論、周圍の人々は勉めて言語につき、心掛けなければなりません。假し兒童に對して、いふのではなくとも、傍に在る時は、自然之に化せらるゝものであります。今これにつけた心づきたる事柄を述べて見ましやう。

一、正しき語を用ゐる事。これ兒童の言語は省略せる所多く、甚だ不正でありますから、發達に伴ひ、相應に導かねばなりません、甚だしきは、兒童の周圍に在るものゝ故ら之を模することを屢々見聞しました。

二、了解しやすき言語を用ゐる事。若し妄に理解しがたき語を用ゐるとときは、これ効なきのみならず、兒童をして、疑惑を生し又は誤解せしむることがあります。

三、激烈なる語勢、其他野鄙な言語の如きはつとめて、慎ひべき事。此等は極めて精密に聽き取りて摸擬するものでありますて、前に申しました通り、他人に對して、いふとするも、他日化するものであります。

なほ子供に對する言語については、色々ござ

いませうが、右は幼稚園時代の子供についての、僅かの観察でござります。

### 幸福とは何んぞ

東京 林 壽 祐

吾が少年の折嘗て土用休暇に際し家にあり、懶々と横臥しながら、能くニウナショナル、リーダ第三卷を復讀したり。第二課は『是レハ甚ダ難クアル』といふ題なりき當時吾は甚だ無頓着に復讀したりしが吾が母は傍にありて之をき、頗る感動したり、此談話の大意を左に記さん。

『デームスといふ小兒が、或時食卓につき、牛乳を飲みつゝ嘆息した』他の小供が甘い食物を食ふのに、己れは獨り麵包と牛乳ばかりで、甘い食物は何にも無い、つまらないなー他の小供は朝何に

も爲ないのに、己れは獨りこんな寒い朝でも早く起きて働かなければならぬ、つまらないなー。他の小供は櫻で雪の上を行くのに、己れは獨り寒い中をブル／＼とふるへながら歩いてばかり往たりする、こんなつまらない事は無い」と時にデームスの母が、側で衣服を縫つて居つたが之を聞き『そりやむ前大變幸福な事ではないか、世の中には食ひたくも、何んにも持たないものが澤山あるのに、お前は食ひ物には不足がないし。又世の中には、家も小屋もなくて、寒い風の吹く地面の上に寝るものあるのに、お前はかうして、屋根も床もある家に寝るではないか。又世の中には盲者もあり聾人もあり、或は病氣に罹つて、毎日痛み苦んで居る者が澤山あるのに、お前は目は見えるし、耳は聞えるし、さうして丈夫で充分働

ける氣力を持てる、夫れを考へるとお前は豪い幸福者では無いか』、「ではおつ母さんは、世の中につまらないものは無いと思ふのですか」、「いへ、たゞた一つある』、「何んです」、「それは、お前がそんなに幸福な身分でありながら、まだ難有ども思はんで、唯つまらん〜〜と不足ばかり言ふが、夫れが即ちつまらん事といふのである！」

噫、善い哉、デエームスの母の言や、吾々は少年の時頗る無味淡泊な章句として通讀したりしが、今に至つて思ひ出せば、實に金言玉語ともいふべく感じらるゝなり。思へ讀者諸君、胸に手を當て、思へ、吾々は既に性を人間に受け、而かも大日本國に生れ、明治の聖世に生れ、美ならずとはいへ、衣食に不足なく、健全にして天地の惠に浴しつゝあるに非らずや。同じく人間といへども、彼

の闇黒なる亞弗利加、若くは南洋土人を見よ、此宇宙の深奥なる眞理妙法を解せず、社交的の温情を有せず、相蹴り相蹴り、肉を飛ばし血を迸らし、朝に攻め夕に殺され悲惨亦極れる。誠に彼等は優に把持すべき二手を有し、言語を發し得るの外、禽獸と相距ること遠きに非らざるなり。然るに吾々は幼にして學術を修め、微弱なりといへども、敢て人に擊たるゝこともなければ、壓せらるゝ事もなく、安全に生命を續けつゝあるなり、幸福何んぞ之に加かん。

思ひ起す、吾々が美なる食物を請ひ、或は熟しといひ寒しといひて不平を鳴らすに當り吾母は吾等を諭めて曰く「書物にあるではないか、世間には貧窮で三度の食事もやつと出来るもの、或は人々の憐みを乞ひ、冷飯のボリ〜〜するのでさへ、食

ふや食はずに居るものがある、それを三度毎に美しい物を欲しがるなどといふのは、未だ腹のすかないせいである。ひもじい時のまづいもの無し、少しあとは世の中の事を考へて見るが宜しい。彼の農夫は何んな暑い日でも田畠に出て、一生懸命に働いてるぢやないか、商人を見なさい、僅か二十銭か三十銭の利益を得ん爲め、汗を拭きつゝ塵の中を此所彼所と走るぢやないか。それが家に居つて、氣隨氣儘にしてるのに、まだ寒くていけぬとか、暑くて堪らんとか、小言をいふのは、餘り無理な談とは思はんかね』と直にリーダの譬喩を持出せり、亦婢僕等が朝早く起き、夕晩くに寝ね、終日勞働し、或は衣食に追はれ、汲々として業務に拮据勉強する者を見、且つ勵まし、且つ慰めて曰く『世の中には同じ人間でも、天性懲に生れ、

面白くも可笑くも無く、一生を送くるものあり、跛足片輪で死するまで、不自由な思をするものあり、盲者で何んな奇麗なものでも見る事なく、生で此社會を黒闇にしてしまうものもあり、啞者で如何なる喜悦苦痛に遇ふも、言語を出す事が出来ないものもあり。又聾者で何を曰ふたか少しども人の意義を知ることの出来ないものもあり、或は金錢に不自由のない身分でも、精神病でたゞ躊躇々と先から先の苦勞をしてるものもあり、或は不治の病魔に侵かされ、毎日憂ひ苦しむものもあり、さるを身體は満足に丈夫で、充分働ける手足と快樂なる精神を持ち、それで腹一ぱいに食ふ事が出来れば、マア幸福者といはなければならぬ、上見ればそら際限がないが、前の不具者から見ると、或は仕事は骨が折れるかも知れねど、心配の

ないのと、身體の丈夫なのが、遙に優つて居る、  
また難有事で有る』と此リーダの譬喩談には、何なん  
人も感動されたり。夫こそ人間は胸一つを以て、  
富貴にも苦みあり、貧賤にも樂あり。古歌の  
『事足れば足るに任せて事足らず足らで事足る身  
こそ安けれ』とか『上見れば及ばぬ事の多かれは笠  
きて暮らせ己がほどく』などは、實に吾等を誡  
むる名句として心に銘すべしものならずや。

つらつら我が婦人社會の状況を見るに、己より  
高貴なる婦人の美衣麗服を着くるを羨み、誰は何ん  
の衣服を仕立たり、誰は佳い帶を注文したり、や  
れ櫛を買だの、簪を購入したのと、無事までも吹  
己の意を満たさざるときは、何處へも行かれな  
ひとか、一ツ着物では外聞が悪い、お雑様が來た

といはれるとか、てこすり廻はし、甚しきは父母  
を意氣地無しと罵るに至る、言語同斷といふべ  
し。聞く日本婦人の設立する團體は、多く衣服の  
競争により成就せずと、豈愧づべきの至りならず  
や、衣服の要是躰温の發散を防遇して、傷害を受  
けざるにあり、其色澤品質を論ずるは第二にある  
なり、虚飾所か世には日常纏ふの衣服にさへ窮  
するもの少からず、然るに充分の衣服を有しながら  
夜心を痛め、父母の厚情を損せしむるとは、無理  
無道も亦甚しい哉、吾等は聊か感ずる所を述べ  
世人が壯健にして衣食に足る以上は、吾が身の幸  
福なる事を喜び、際限なく慾望を抑制し、以て此  
鴻大なる造化の恩恵に感謝せんことを、欲するも  
のなり。

(終)

## 五十音歌

岐阜縣 松原 榮翠

六十一

んく  
 くの字とやー苦みあれば其後に樂みある事ぞ頼母  
 敷きく  
 けの字とやー懈怠勝なる子供等は老て悔共甲斐は  
 なしく  
 この字とやー孝行つくす其者は未に譽はあるなら  
 んく  
 さの字とやー去るも進むも法があり人に笑はる所  
 作するなく  
 しの字とやー忍べば忍べぬ事ぞなき忍べぬ事を能  
 く忍ベく  
 すの字とやー相撲の始は誰なるぞ野見の宿禰と蹴  
 速なりく  
 せの字とやー精神外に散らさず學へよ勵め子供  
 達く  
 きの字とやー氣儘に育つ其人は未に惡業あるなら  
 聽けく  
 かの字とやー重なる事のあるどても親の仰は直に  
 知れく  
 ふの字とやー教の庭に遊ぶのも前世の種のよきと  
 知れく  
 うの字とやー後ろや前や右 左 考へ遊ぶは愛らし  
 きく  
 えの字とやー得たる事をば人々に教ゆる人社稀な  
 知れく  
 るぞく  
 ふの字とやー教の庭に遊ぶのも前世の種のよきと  
 知れく  
 かの字とやー重なる事のあるどても親の仰は直に  
 知れく  
 きの字とやー氣儘に育つ其人は未に惡業あるなら  
 聽けく

その字とやー祖先の恩の高きこと富士の山より猶  
高し／＼  
たの字とやー高きに登るも低きより一步／＼に進  
み行け／＼  
ちの字とやー智識ありとも自慢して誇る者社見惡  
くけれ／＼  
つの字とやー司となりし其者は道行く時も氣を付  
けよ／＼  
ての字とや一手足や面に墨付ず學べよ勵めよ習字  
をば／＼  
との字とやー所を人に問はれては訥らず慥に答せ  
よ／＼  
なの字とやー一名高き慈母の三遷は孟子の稚き時な  
るぞ／＼  
にの字とや一日日本に生れし我々は必ず君に忠盡せ  
せ

ぬの字とや一縫針出来る娘兒は人に學られ敬はる  
義なり／＼  
のの字とや一野山に遊ぶ小鳥さへ鳴て吾友誘ふぞ  
よ／＼  
はの字とや一鳩に三枝の禮があり禮なう人ぞ耻か  
しき／＼  
ひの字とや一人の誹りをなす者は必ず人に誹らる  
い／＼  
ふの字とや一富貴な家に生れても貧き者に自慢す  
な／＼  
への字とや一平生藝に氣を付て覺ゆる者社少なけ  
れ／＼

ほの字とや一譽は誰も望むなり望む人こそ譽なし  
 まの字とや一誠の道は暫くも離れてならぬ道なる  
 みの字とや一美濃の鶴飼と養老は外國人も尋ね來  
 るく  
 むの字とや一村で遊ぶ其折も言葉や所作を謹めよ  
 めの字とや一恵み心のある者は蔭で人が慕ふな  
 りく  
 もの字とや一孟宗竹の出初めは親に孝せし効なり  
 やの字とや一日本魂有るものは陣に臨めば勇氣ま  
 すく  
 いの字とや一諫むる心の有る者は常に我身を謹め  
 れの字とや一禮義作法を謹めば人に愛敬受るぞよ

ゆの字とや一讓り合ひして渠分けん融の行見習へ  
 よく  
 えの字とや一英國迄も留學に出掛る基は小學校  
 よの字とや一心のなき者は神や佛の養護ある  
 らの字とや一樂くに暮る父母の教育受けし恩情へ  
 ありく  
 るの字とや一留守居の時は東の間も心はなすな我家をく

るの字とや一論を企つ其者は立身出世の例なし

### 子守歌

古 剣 生

わの字とや一譯も分らぬ事柄を人に話して惑はず  
な／＼

ゐの字とや一石より堅き心にて爲せば成らざるこ  
とぞなき／＼

うの字とや一鬼は疾く走れ共龜に負けたる談わり  
＼

ゑの字とや一榮耀永花を好みずに一層觸め子供達

の字とや一治まる御代に生れきて君の恵みぞ忘  
る／＼

○朝は早よ起き。心を正し、今日のつとめに、精  
を出せ。／＼

○蔭とひなたの。隔てをつけず。子供だいじに守  
をせよ。／＼

○畫にもかいたら。見苦しからう。人の心の。奥  
底は。／＼

○支那にかへした。遼東半島。永く忘るな。國の  
人。／＼

○富士は高いが。それより高い。親の御恩を。忘  
るなよ。／＼

○雀雀よ。何と曰うて鳴くぞ。君に忠。忠。いう  
てなく。／＼

自作の子守歌を印刷して子守等にやりましたが子守等によろ  
こんで謹ひました

懸賞質問題!!

左の如き質問題出たり。規定によりて讀者諸媛の解答を望む。但し本題は頗る有益有趣と認むるを以て解答の上乗なるものには賞品として於ては本題提出者に向つては

本誌一ヶ年分を呈すべく。又此場合續々奮つて寄稿せられよ

- 子守する身は。行儀がだいじ。脊の子供の。手本ぞよ。／＼
- 子守する身も。暇ある時は。文字やお針を。稽古せよ。／＼
- わねはお針に、妹は學校。わたしは守して。親だけ。／＼
- あの子仕合。學校に通ふ。わたしは守して。日を暮す。／＼
- 雀見たよな。小鳥でさへも。君に忠。忠。いうてなく。／＼
- あれを聞かんせ。鳥でさへも。親に孝。孝。言てないか。／＼

尙別に一題あれども、次號に譲れり。其他讀者の卓論玉説机上に堆積し、悉く登載するを得ず。意に背くこと甚だ大なり。漸次序を追うて掲載せんとす、乞ふ諒せよ、但し凡べて投書規定に従はれざるは是非なく没書するこありと知られたし。

質問題

提出者 岐阜縣 田口由之助

婦人の側より見て理想的の夫とは、如何なる資格を具備せしものなるか

右投稿〆切期限十一月十五日のこと。

驚き起つ、熟視すれば町餘の此方離の中に繩を引ける童あるなり、當年とつて僅に六歳許人里遠き山際には終夜いぶせる煙太からず搖曳し猪猿など爲に稻の穂を荒す能はず。



十月の天地

ま、か  
生

天澄み、風清くして、氣色日を逐ひて靜肅、方これ散策の……遼乗の好季節となりぬ。

麥蒔、頓て始まるべし、多忙いはむ方なし、老幼男女鋤鍬を手にして之に當り、綽々餘裕あり。大麥、小麥、油菜、小松菜、蠶豆、豌豆、夏牛蒡、人參など亦相前後して、種と下すべく。木城、牡丹、芍藥、櫻、柿、桃の植替。葡萄、野木瓜、牡丹などの接木及び挿木等、亦此頃を可とす。

千草漸く凋落し、薔薇の花、雪の如く咲き、菊の中に立ち、彼方の鳴子突然鳴り動き、雀群大に

は近く雷を破らむとす。

里近き柿は緑より黄に、紅を帶びて熟せむとし

山鴉來り誤つて澁柿を啄いて其黒き顔をしかむ、

蟹あり、小溝の岸の叢より窓に太き腕を出して落

ちたる柿を引かむとす。谷なる栗は奮然として撻

彙を破りて躍り出で、栗鼠莞爾として現はる。麓

なる蜜柑は綠葉中に黄點し始め、鶴山奥より出で

来る。根室の濱宗谷の邊、鮭漬刺として躍る。

十五日、銃獵期に入る。數行の鴻鷹列を正して

北より来る。昔は遠征途上、晚秋の月三更、槊を

横たへて詩を賦したる丈夫あり、今は拂曉に銃口

を擬して一發、其妹背の一羽を射落さむとする所

謂紳士といふものあり。

蚯の聲止んで蛙亦土中に潜み、蜻蛉亡びて蟋

蟀仆れ、黃色の微光を止めて夕陽は沒りぬ、空は

青黒みて、芒に慄く北風いたく身に沁み渡り、四顧寂寥として唯吾獨存す。西行曰く、心なき身にもわはれは知られけり鳴たう澤の秋の夕暮。芭蕉曰く、枯枝に鳥のどまりけり秋の暮。

晝間、益讀書するに適し、燈下には更に親しき心地す。半宵古英雄偉人の傳記を繙きて慨然として長嘯するものあるべく、節婦烈女の事跡を

讀みて、荒くれ男兒の頬邊時ならぬ時雨ふるともあらむ。

長安一片月、萬戸擣衣聲、昔佳人を泣かしめた

りき月は千門を鎖ざして靜なり折しも起る遠郊の

笛聲には、清涼今尚ほ人の骨に徹す。猛虎一嘯し

て全谷轟き、山月凜として高し、烈夫蹴起して鏘

として劍に聲あり。

朝霧一帶の中、青山遠く突兀として其巔を現は

し近き堤上の並木朦朧として辨し難し、音あり、  
曉風に馬を驅つて清流に入れるなり。

### 穎敏な娘と母の愛讀の書

#### I. Y.

合衆國の西の方にわたる田舎に一人の婦人の教師がおりましたが、或時この婦人の學校へさる一

家族から四五人の子供が入學致しました、然るに此四五人の中唯一人を除く外は皆遲鈍で亂暴で、申さば全く無賴漢とでもいふべきでした。で、この子供達の兩親といふは、まことに貧乏な無學な下等社會の人々でしたが、さてひとりの例外な子供といふのは、女兒であつて至て上品な穎敏な兒でして在學中著しく發達しました。

そこで、女教師先生はかく兄姉達と違つて居

るこの女兒に付いては、定めて何か理由のあることであらうともひましたから、だんぐり母親に聞て見ますけれども一向わかりませぬ、たゞ母親の申しますには私の子供たちは皆この淋しい所で、同じやうに成長し同じやうに扱はれいつも一所に居て少しも別れたこともありませんとまづこうなのです。

母親はこの娘がその兄や姉達と大變ちがつて居ることは氣付て居りましたけれども、さてなぜであるかといふことは一向存じませんでした。

そこで、教師はさらに母親にむかひ、この女兒が胎内にある時、母親の生活の有様に他の子供の時と何かかはつたことはなかつたかと尋ねますと、母親は決して何事もありませんでしたと答へましたが、稍考へて後「ア、唯一つちよつとし

たことがありました……而しこれつばかりのことは何の關係もありますまい。それはかうなので、あるひわたしの宅へ一人の行商が來ましたが、この商人の持て居た書物の中に一つまことに美はしい赤い表紙の詩の本がありましたから私はそれがほしくつてほしくつてたゞりませんでした、けれどもとうく良人が買ってくれませんで、そのうち商人は行てしましました、私はどうしてもこの本を思ひ切ることが出来ませんでしたから、夜になつてから自分の金をとり出して、そつと家を出で、隣の町まで歩いて行つて、行商を目指けだしましてその本をかひ夜の明けない間に家に歸りました、それからといふものは此本をいくどとなく繰りかへしてはよみ、くりかへしてはよみほんどうにこの娘の生れるその日まで、殆んど毎日よみま

した、理由といへばまあ是れ女だけのことなのです」と答へました。

### 幼稚園を出した児童と家庭から行つた児童との學校での

#### 成績の比較

此問題は頗る興味あるものとして世間の人が多く知らうとしている所なのである。勿論統計をしてからつて漸二十人位の子供の數でするのだからたゞひ二點や三點づゝ位の得點の相違があつたからとひ、これを強いてどつちかの原因に歸することは、無理でもあらうし、又夫で強成績の良否を一刀兩斷に決めて仕舞ふ譯にも行くまい、が、大体の方向が幾らか知れぬでもないから、左に比較表を擧ることにした。

附記、左表は本年三月試験の成績を兩高等師範附屬學校について調べたので、十人未滿の數のは省くことにした。尙通覽の便のために學科を文科的理科的及技藝的に別ることにした。

女子高等師範學校附屬小學校  
尋常科一學年

比較強	家 庭	幼稚園	在園		人員	年齡	文科		技 藝		科		業全學
			年	月			讀書	算術	習字	圖畫	手工	唱歌	約
四	九	二	一	七	五	八	六	七	九	八	七	六	八
三	八	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
二	七	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	六	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
比 較 強	家 庭	幼稚園	比 較 強	家 庭	比 較 強	家 庭	比 較 強	家 庭	比 較 強	家 庭	比 較 強	家 庭	比 較 強

同高等科第二學年

(以下次號)

平たい野原を東になして、西には蘆間にボツリ／＼と家が見え、中を流る藻屑川、ユラリ／＼と小舟を浮けて、波のまに／＼今太公望の鮑釣を後に残して南に向けば、蘆邊の鶴の二つ三つ今も長閑に遊ぶなる和歌の浦邊は右に見え、左の岸なる葦の上、茅の屋根の片隅より昇るは名に負ふ三葛海士の鹽たく煙なり、煙よ煙、鹽焼く煙、舟を繋ぎて岸に上りて見渡せば、名草の山の楚まで坦々たる鹽田幾頃町區劃正しく碁盤の如く、中に三四の茅屋バラ／＼と散在す、柴の戸たゝきれとなへば、出て來し爺は六十近く我等の來意を聞き終

旅の土産

澤 生

り、いと心安げに打出で、

鹽田は見らるゝ通り泥土をたゝきて平しにさき、

細砂を一面厚からず敷く、御身が上つた岸の下

に大きな土壠が開いてある、潮満つれば其壠口

より此田の中にさし入つたのを、退潮の前に壠

を塞ぐ、そこで鹽田一面潮の海、礦どくる夏の

太陽の焼き日出の後の名草の山の山風袂涼しき

夕の和歌の海風、など遠慮なく此池の水分を奪

つて行き、砂に残るは鹽分ばかり、それから……

と爺は田の中の小高き方形の土臺を指して、

彼の臺に砂を搔きよせ山に積み、更に新たに鹽

水をくみ來りて之に注がば、鹽分溶けて滴り落

つるを一方に受け置きて、檐桶に之を汲みとりて、

と言ひつゝ蘆の中なる例の小屋に向ひなほり、我れ

等を内に導きて、二間に一間半の方形で深さ六寸の鐵の釜に、今や沸々煮えかへる鹽水に浮び轉がる褐色の泡を汲みとりながら、

斯様に下から焼き始め、大抵一晝夜足らずにて

水分は蒸氣になつて終ふ、跡に眞白の食鹽が厚

い板のやうになつて殘る、それを俵にして送り

出す、御身等がいふ煙の見ゆるは此竈の下から

出る煙、燃料は今は大抵石炭を焼く、此處は尤

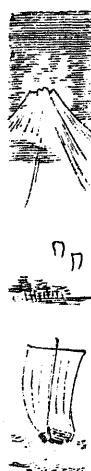
も薪で御座る、

など鹽焼く爺には、さして辛さも知らぬ様子、さて

煙に煤はつた面黒い爺かな、我は爺の厚意

を謝して舟に歸つて、風と波とに送られて和歌の浦邊に上つたのは去りぬる八月中頃のとなりき。

第十九統計年鑑で繰出して見れば、食鹽の主なる產地は左の通り、



縣名	千愛石	兵岡廣山	本岡山	西本岡	中州本岡	石川知葉
田原	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
三河	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
伊豆	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
遠江	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
三浦	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
相模	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
武藏	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
信濃	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
近江	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
丹波	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
淡路	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
備後	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
備前	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
周防	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
長門	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
熊本	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
大分	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
宮崎	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
鹿児島	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
沖繩	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
北海道	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
北區	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
及び	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
北	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
海道	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
並	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
沖繩	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
は概して	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
少額で、	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
臺灣のと	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
分	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
大	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
北	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
區	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
及	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
北	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
海	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
道	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
並	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
沖	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
繩	103,900	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000

は統計には未だのつて居ないが、からい話は一先これで。

### 女子美術學校

本年四月本郷弓町に設立した

る同校は追々盛大に至り、既に二百餘名の生徒わ  
りて校舎の狹隘なるが爲に、先月來新入學を謝絶  
し居れる程なるを以て、更に駒込太田の原に新に  
校舎を増築し差當り尙五六百名の生徒を容るべき  
の入學者に便せむとし日下專ら準備中なりといふ  
同校は日本畫、洋畫、彫塑、造花、刺繡、蒔繪及裁縫  
等の諸科を設け女子に適する高尚優美なる技藝を  
授け且之に關する諸學科を教ふる由にて、其の授



業料は、普通科修科は各一ヶ月一圓五十錢、高  
等科二圓にして、入學金は各科共二圓、寄宿料は  
一ヶ月金六圓なり。

◎第二高等師範學校 廣島市國泰寺村に建設さ  
るべし、第一高等師範學校は既に地盤工事を終り  
山本文部技師の検査を經たれば是よりその建設に  
從事すべき筈なるが、元來同設計は第一區工事と  
して先づ附屬小學校を建設すべき豫定なりしも、  
都合ありて之を中止し更めて第三區工事として設  
計しわりし本校の分を繰上げて建設することとな  
し、滿一ヶ年にて竣工し明年九月より授業を開始  
すべく見込なりと尙全部の落成期は七ヶ年を要す  
る筈なりしも該校は目下の必要に迫り居るを以て  
斯くはその竣工を急ぎ満四ヶ年を以てその工を竣  
る筈なり。

●東京府第一高等女學校 の改築地は愈々淺草  
區七軒町に決定し、土地買上、家屋移轉等につき  
所有者と交渉中なりしも、未だ調談の運びに至ら  
ざりしが今回愈々土地收用法に依る事となり。二  
三箇月中に、地形工事に着手すべく筈なりとい  
ふ。

●女子醫學研修所 濟生學舍に於て先頭組織改  
正上女子部を廢したる結果神田三崎町に設立した  
る女醫學研修所は、目下は専ら前期學科の教授を  
なす由にて、飯盛、石川、曲淵森安の諸學士教授の  
任に當り、今後は一層擴張を計り、況く生徒を  
募集し女醫の養成に盡力せらるゝ由。

●普通看護法講習生募集 此度東京帝國大學醫  
科大學附屬醫院に於ては、普通看護法講習生左の  
通募集する由、志願の者は願書に履歴書を添へ來

十月二十日迄に願出で試験期日に出席すべしとなり。

人員 四十九名給費

年齢 滿二十三年以上三十年以下の女子にして家事に係累なしもの

試験期日 十月二十三日午後一時

試験科目 一、讀書漢字交文、二作文往復文、三算術加減乘除、四體格

### ●女學生の寄宿舎

大日本婦人教育會にては、夙に女學生のために完全なる寄宿舎の必要を感じこれが計劃中なりしが此度會長毛利公爵母堂、及、副會頭銅島侯爵夫人、その他主なる會員諸氏の間に、その議熟し、差當り赤坂表町二丁目十三番地なる、同會事務所に、女生徒の寄宿を許す由、なほ同寄宿舎は、女學校教育の缺點をも補はん爲適當の監督兼教師を置きて、女生徒をして日常家庭の實務に習はしめ、父母の膝下にあると等しく、

### ●愛國婦人會

發會以來急速の進歩を以て發達せる同會は先月三日京都に於て支部發會式を舉行せり來會者百餘名、當日入會を申込みたるもの百餘名、先、高崎築子開會の趣旨を述べ、次に、八田艶子、奥村五百子、並に近衛侯爵の演説ありしとのことなり。

### ●高等教育會議規則改正

昨日勅令第百八十一號を以て同規則第四條第一項を改正し教育會議各員中へ内務省地方局長醫學専門學校長（一人）東京

和樂の中にその業を終えしむる目的なりといふ。  
●我國圖書館の最近の調査

東京	二	大坂	一	京都	一	愛知	一	
静岡		二	宮城	三	德島	一	新潟	四
千葉			三	三重	一	高知	一	
廣島	一		熊本	一	奈良	一	青森	一
石川		一	富山	一	茨城	一	福島	三

### 以上合計三十一箇

外國語學校長及び道廳府縣視學官（二人）を加へ私立學校長一人なりしを四人に増加したり又職務上當然議員たる者及び第四條第一項第十二乃至第十四の議員を除く外現任議員は此勅令施行の日より解任さるゝとなせり

●女子靜修學館　日本橋區小舟町なる同館は其目的とする所は専ら商工家の子女に日常須要の學術技術を平易に教授し以て他日商工家の良妻賢母たらしむるにあり。從來一定の規律秩序を考へざる裁縫師等の許に學ばしめて遂に不測の過誤に陥らしむるを慨して出來たるもの、目下生徒數四十名位なるも今後大に擴張して生徒を容るゝ筈なりといふ。尙規則其他は次號に紹介すべし。

●女子國文講習會　今回、帝國教育會に於ては内藤恵叟、松下大三郎、三輪田眞佐子、渡邊文雄、

國分操子、大川茂雄、佐々木信綱等の諸氏を聘して女子のために國文の講習を開き來月六日始業式同十五日より授業、會期六ヶ月間の由。

●犯罪と職業の關係　澁谷の東京感化院長高瀬眞卿氏曰く農業部に屬する院生は自然感化も早く順良の性となり易く小細工、手仕事等に從事するものは性質却々改まり兼ねる實跡われば工藝部の方は一寸考へものなり世に植木屋に犯罪者鮮しこと云へるは眞なり職業と犯罪の關係は爭はれぬ事實なれば人は職業を擇ばざるべからずと。

●英國女子師範教育家の來朝　英國ケンブリッヂ大學内、女子師範教育部長たりシミス、ヒュース娘は今回我が國に於ける各種教育事業を視察する目的にて來朝したるが女子高等師範學校教授安井哲子女史は英國留學中師弟の關係ありしを以て、

同伴して去月十一日午前文部省に出頭し、ヒュー  
ス娘は携へ來りし紹介狀によりて、其の目的を  
述べ、便宜を與へられたしと請ふところありたる  
に付き、文部省よりは大島視學官、野田屬をして  
案内説明せしむるとどし、十三日午前九時より東  
京府に出頭し、岡視學官同行にて、府立第一高等  
女學校、及び私立女子職業學校を參觀し、續いて  
各種の學校を參觀したるが、其の視察事項は、各  
種學校の設置、一般教育の風潮、學科編制上の適  
否、倫理教育の基礎等にして、娘は倫理教育の點  
に就ては、最も注意せりといふ。

海 外 番 報

米國大統領の訪問  
北米合衆國大統領マッキンレ  
ー氏は去月八日バッファロー市博覽會場に於

て兇徒の爲めに狙撃せられ、同十四日遂に逝去せ  
られたり。氏は千八百四十四年ヲハヨ州ニールス  
に生れ下院議員州知事を経て九十六年推薦せられ  
て大統領となり、任期満ちて本年三月更に再就職  
の榮を得たり。氏は共和黨の雄領として銀貨問題  
に帝國主義に、常に其敵黨なる民主黨と戦つて勝  
を制し、任職中沈倫救ふべからざる一國經濟界の大  
勢を挽回して商工業をして今古無比の發達を遂  
げしめ、外方に向てはハワイを併はせ西班牙と戰  
ひフキリツピンを占領し着々として膨脹主義帝國  
主義の實を擧げ來り爾來共和黨の勢力をして隆々  
として旭日の如くならしめしが、遂にリンコルン、  
ガーフィールド氏等と同じ運命に斃る、に至れり  
ガーフィールドの言葉は實に下の如し曰く「諸君さらば、  
是れ神の道に從ふものなり、神の意の儘にあれ」

時に午前二時十五分。氏の逝去につき副頭領ル  
ベルト氏代りて其職を襲げり。

●女子と職業との關係 獨逸の精神病専門學者

チムメル教授は此程獨逸奥地利露西亞瑞西の女子に就きて研究の結果女子をして男子と同一の職業に於て競争せしむるときは女子に發狂者の數を増加すること驚く可き程なりとの事を發見し其一例として曰く獨逸の女教員中精神病に罹り居るものは男教員の二倍なりと。

●紐育の既婚婦の裁判官 北米合衆國「ニウヨルク」州に於ては十二歳以下の兒童の犯罪者を裁判するには結婚したる婦人を裁判官となせりと。

## 新刊紹介

●幼稚園唱歌 全一冊 共益商社編

歌詞は東基吉氏及津山人の筆に成り曲は先般洋行せられたる瀧廉太郎氏及鈴木毅一氏東くめ子氏によりて作られたるもの、由題目の選擇排當等最其宜しきを得たるが上に樂曲には一々伴奏を附せられたるは使用者に取りて最便利なるべし。(定價四十錢 發賣所共益商社)

●現今之社會學 全一冊 遠藤隆吉著 僅々六十頁の小冊子に過ぎざれども、斯學の要領を最簡明適切に説述せり。(定價三十錢 發賣所金昌堂)

●修身教典唱歌 上巻 唱歌遊戲研究會編

尋常一學年の材料にて出來たるもの、普及社發行の修身教典と聯絡したり。詳説は後日に譲るとしてこゝに教科書として最適當なるものとして推薦せんとす。(定價八錢)

●中等單音唱歌 全一冊 益山鎌吾著

師範中學高等女學校教科用書として出來たり。大和田旗野等諸氏の作歌になる。詳細は後日に譲る、打見たる所体裁優美且つ所方に高尚の繪畫を挿めるなど用意至れり。(定價四十錢 以上二書發賣所十字屋)

# 會

● 漢本紐結包物教授法 全一冊 石井泰次郎著

禮節故實に堪能なる石井氏が普く古來の傳書難形を收容し其種類の可否選擇につきめ其使用法の誤まれるを正し部類を分配し以て此技藝の容易に習得せらるゝ目的にて著述せられたるもの、美麗

高尙なる標本數十種に添ふるに懸焉丁寧なる教授法一冊を以てす禮節教授の任に當れる人々の唯一の参考書たるは云ふまでもなく各自の家庭に於ても是非一本を備へて可なり（定價標本ごも一圓五十錢 發賣所 嵐山房）

● 遊戯雑誌第一號（月一回） 日本遊戯調査會發行  
先月二十五日を以て新に發刊せるもの、欄を分ちて講話、學校遊戲、家庭遊戲、高等遊戯、史傳、雨中肺育談、彙報等となせり、吾人は此の如き眞面目なる本誌の將來大に健全なる發達をなさん事を祈る（定價一冊十錢）

婦人衛生雑誌百四十二號 うらにしき百七號 家庭九號

女子の友九十八、九號 女鑑二百三十四五、六、七號 令徳第

三卷六、七號 をんな八號 考古界第一篇四號 哲學雑誌

百七十五號 東京府教育雑誌百四十一號 東京市教育時報十

二號 教育學術界第三卷五號 日本之小學教師第三十三號

あけぼの四號 教育時論五百八十九、九十、九十一號 姫百合

第四卷二 兒童研究第四卷五 婦人新報五十三號

注意！ 新刊寄贈の節は必らず本會宛名を附

して御送附有之度候

會報

一、幹事更迭 前任幹事神門とも子氏辭任せられしに付き小關せい子氏に依頼して承諾を得たり。

一、幹事會 先月廿二日女子高等師範學校附屬幼稚園内に開き本月開會すべき本會常會に付きて諸般の打ち合はせとなせり。出席者中村主幹 清水鶴子、雨森鉄子、林文子、松村久子、稻石泰子、小關せい子、羽田晴子の八氏なり。

# 入會

## 東京ノ部

四谷區荒木町二七

日本橋區小舟町二ノ二

淺草區千束町二ノ一四〇

小石川區御茶ノ水三四

麹町區四番町一四

小石川區原町一三三

麹町區平河町四ノ一三

牛込區南櫻町一九

高橋 いち  
塚 越 くが  
淺井 はづ  
石川 ふき  
相馬 宗孝  
伊澤 丑三  
御崎勝巳

# 號十第卷一第一もど子と人婦

京橋區明石町四六新榮女學校

地方ノ部

甲府市紅梅町

同

長崎縣南高來郡加津佐村山口

熊本縣阿蘇郡坂梨村

丹江國船行司員各等八品官

福岡縣師範學校

伊豫國周桑郡壬生川町

北海道函館會所町五九函館幼稚園

東京府荏原郡大井村三一四四  
更只守之豊島郡南二庄町七三

東坡全集

曾公集

自八月三十一日  
至九月二十日

一金六	一金五	一金四	一金三	一金二	一金壹
拾	拾	拾	拾	拾	拾
錢	錢	錢	錢	錢	圓
錢	錢	錢	錢	錢	錢
至同三	至同三	至同三	至同三	至同三	至同三
十四	十四	十四	十四	十四	十四
十年	十年	十年	十年	十年	十年
七月	八月	八月	八月	八月	八月

杉山はま  
進藤つる  
圓井まつ  
栗原いし  
高木まつ  
井上牛介  
波多野もぐり  
久芳龍藏  
越智みよ  
武藤うめ  
手塚不二夫  
石山ひさ  
徳永ふく  
小野てる  
矢澤わさ  
印東おさな  
進藤ゑい  
海野きみの

酒井ふくがい　栗原いしはら　高木まつも　本ほん　武藤ぶとう  
井いの　越くわ　木き　上じょう　木き　松まつ　木き　藤とう  
木き　高たか　橋はし　木き　進すす　藤とう　木き　いぢ  
木き　土つち　谷だに　尾お　田た　けい　りる　けい　りる  
安やす　神みこと　武むすめ　宮みや　武むすめ　みこと  
中原あらわら　ふく　波多野あぐり　波多野あぐり

四

三

瀬野梅代  
吉田まさ  
富岡むか  
安達けい  
新開み枝  
田邊はる  
大島小春  
中川るね  
澤村さみゑ  
小谷野千代  
野尻てつ  
村山つね  
久芳龍藏  
飯野ふく  
大染いよ  
緒方きく  
越岡つき  
室地えい

追而本文中誤謬脫漏等有之候節は乍御面倒御一報下されたく候

會

告

一轉居改姓會  
一會費速  
候會費是女子高等師範學校內フレーベル會宛てにて郵便爲  
替を以て御送下されたり。但し領收證は別に差上げず雜誌面に掲載可致  
れども宜しく候。便宜左の諸氏へ御渡し下さい。  
華族女學校内野口ゆか子、森島みね子、小關せい子、淺草區柳北小學  
校佐々木き子、女子高等師範學校林ふみ子、松村久子。  
一市内配達東京市内の會員に限り雜誌配達は去る九月より市内  
着等有合資會社に依托致し候間御承知下されたり。若し又不配達延  
候節は乍御手數本會あて御一報相なりたく候。

本誌稿〆切毎月十五日

高等師範學校三山春次編

菊刊美本全一冊

定價一拾五錢郵稅六錢

○女子書簡文に於る通弊は優婉を專として浮華に流れ冗漫の筆を弄して實用に遠かるにあり本書  
は教育社會の輿論に従ひ古今雅文の粹を學びて婦人をして飽まで其特有的高雅艷麗の體を存じ  
同時に必ず簡潔にして實用に適する文を作つしめ是等流弊を矯めんとせらる者なり

發行所

東京市南傳馬町二丁目五

秀

英

舍

此廣依に告御文注方御は人婦と供子を見るた旨御付記を乞ふ

## フレーベル會規則

廣 告

第一條 本會ハ幼兒保育ノ改良發達ヲ圖ルナ以テ目的トス

第二條 本會ハフレーベル會ト稱シ東京ニ置ク

第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒保育

ニ篤志

ナルモノニシテ會員ノ紹介ヲ經マシ

第四條 會員ハ本會ノ經費トシテ一ヶ月金拾錢ヲ獻出スベシ

第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノハ

特ニ請ヒテ客員トナスコトアルベシ

第六條 本會ノ目的ヲ達セシガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ一總會毎年四月二十一日之ヲ開キ保育ニ關スル演說談話保育參考品幼兒成績物展覽、

會務ノ報告、幹事ノ選舉等ナス

但シ會日ハ會長ノ意見ニヨリ之ヲ變更スルコトアルベシ

一 常會 每年二月、六月、十月、十二月ノ第一土曜日之ヲ開キ保育ニ

一 關スル演說、談話、協議、實驗等ナス

一 組合會（會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスル者）以テ組織ス

但シ別ニ組合會規約ヲ定メテ會長ノ承認ヲ經ルモノトス

一 雜誌發行 每月一回雜誌ヲ刊行シ之ヲ會員ニ配布ス

一 前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件

第七條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

第八條 會主幹長一人 會務ヲ總理ス

幹事會長一人 會務ヲ輔佐シテ會務ヲ掌理ス

評議員 十一人 會長ヲ補充ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス

幹事會長若干人 重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ズ

幹事會長ハ客員中ヨリ推選スルモノトス

第九條 主幹ハ會長ノ特選トス

第十條 幹事ハ會員ノ互選トシ其任期ヲ二年トス

但シ毎年半數ヲ改選スルモノトス

第十一條 評議員ハ會長ノ特選トス

第十二條 本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ル、コトアルベシ

第十三條 此規則ハ會員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラサレハ變更スルコトヲ得ス

## 女子國文講習會

會日 火曜日 金曜日 日曜日

十月六日午后一時始業式 十月十五日ヨリ始業

規則入用の向は郵券貳錢を送れ

○學科及講師、枕の草子、文法、作歌（渡邊文雄）折たく

紫（内藤恵叟）保元、文學史（大川茂雄）土佐、俗語文典

作文（松下大三郎）古今集（國分操子）作歌（佐々木信

綱）修身（三輪田真佐子）

志願者は至急申込みべし

神田一ツ橋通帝國教育會內

## 女子國文講習會

此廣告に依り御文注の方は婦人と供子を見る旨を記附するを乞ふ

毎二月回

行發日十二日五

國光社編輯部編輯

女鑑

定一冊(三ヶ月分)前金五拾七錢  
十二冊(半年分)同壹圓拾錢

全國無遞送料

價廿四冊(一年分)同貳圓拾錢

女子教育の盛なること今日の如きは無きと共に女子が品性の墮落せる亦今日の如く甚だし  
も東洋の君子國<sup>ノシキノク</sup>秀麗端正なる婦道<sup>スルノミコトノミコト</sup>自然に存涵養<sup>スルノミコトノミコト</sup>之を發揮<sup>シテ</sup>貞淑<sup>シテ</sup>賢良<sup>ヒツヨウ</sup>婦女<sup>ヒツヨウ</sup>雄大忠誠<sup>ヒツヨウ</sup>なる國民の慈母たら<sup>シメンコトハシメルコトハシメル</sup>養成<sup>シメル</sup>して之を是れ<sup>シテ</sup>大に記事を精選<sup>シテ</sup>以て圓滿なる婦道<sup>ノミコト</sup>指南車<sup>ノシキノカ</sup>となり世好<sup>シテ</sup>と時流の表に卓立<sup>シテ</sup>して誠心誠意<sup>シテ</sup>我<sup>ガ</sup>本領<sup>ヲ貫徹せん</sup>こと

女鑑第二百三十六號(九月五日發兌)重要目次

(口畫)華族女學校卒業生合作富士川之真景●同卒業生の寫眞●山陽外史母梅廳女史の眞蹟  
(社説)こゝろから(論說)女四書に就て細川華族女學校長●女子の學問岸田松三郎(精華)日  
本女訓川崎重陽●賢婦るむ子傳指原乙子(家政)衛生上に於ける看護法の一群久我下<sup>ク</sup>トル  
上卷結び石井泰次郎●たいたいところ●大根栽培法近藤農學士(學藝)紫式部日記講義井上皇  
漢文學講義佐々木天游●和畫通信講義山崎彩峨(文林)東久世伯爵外諸大家の歌  
中事文等(漫錄)女訓綾廻離形揖取宮中顧問官●各國婦人の特色三石直方●女子要書解題三浦古員  
中學校教諭●詠史百首評論海上胤平●作文雜話安藤日本女學校講師●衝口漫言新井山口  
苑編纂員●詠史百首評論海上胤平●作文雜話安藤日本女學校講師●衝口漫言新井山口  
乞食二石眞子(雜報)竹之園生●心の錦●教の葉●桐の一葉等其の他數件

(後付の二)

發元賣館思靜

東馬京市橋南區地番七丁目

此廣依に告御文注方御は婦人と供子を見る旨御附記を乞ふ

# 總裁小松宮大妃殿下 大日本文學會發行

(東京麹町區土手三番町二十八番地)

卷之八號目次

第八號發兌 每月一回二十五日發行

第一號以下再版出來 定價一冊 金拾五錢  
全國無遞送料

東京堂

本誌は學識と經驗とに富み而も婦人問題に熱心なる諸名家の贊助により誠實に女子の本分を完ふせんと心がけらるゝ淑女達の友たらんとを期し世の俗流に阿リて漫りに讀者の多からんとを望まず總べて不要の裝飾を省きて専ら記事の精撰に努め以て婦人雜誌たる品格を保たんとする。○本誌は其欄を論說學藝修身齊家世務史傳譚艸詞藻雜錄時事彙報に別ら普通に掲載する家政上文學上に記事の外に二二科學の大意を掲げ學理の概要を得せしめ一二和漢名著の綱要を掲げ諸書の沈獵に使ならしめ二三法制理財の事を平易に者著しき時事を説明し内外の情勢に通せしむ。○本誌の記事は語格文法は勿論振假名句讀に至るまで誤謬なからんとを期し野卑なる言語又は劣等なる戀愛にて關する文字を避けて且つ賣藥其他下品なる廣告を掲げず。○本誌は勤儉貯蓄の美風を獎勵せん爲に毎號慈善貯金切手を採入して摸範を示す。

## 第八號目次

(卷首筆蹟)武村千佐子筆歌かるた論(同情と刻薄)佐方鎮子○女子の職業に就いて添田博士(學藝作歌批評)大口飼二〇作批評  
今泉定介○沙翁梗概中島孤鳴○本邦女子服の沿革下田耕子○心理學大意(論)高村抱月○公德と私徳(例同)  
博士○他山の石登張中島孤鳴○本邦女子服の沿革(論)高村抱月○公徳と私徳(例同)  
法學士○泰澤西禮法津川梅子○家庭上注意すべき問題(論)法津川梅子○家庭上注意すべき問題(論)  
經濟學伊藤秋南○各地產業の實況(史聞)故英國皇婿と博愛事業井ルスン夫人(譚草)暗流水谷不倒○文化され孤  
稚法則(論)戸法學士○廿四孝の歌(詩)○権の舍社中の歌○みやび會員(詞)藻(雜錄)英國故女皇陛下(詩)吉偶感(集解)  
千佐子○新選女百人一首略解○小兒語(時事)○小兒語(時事)時事御教恤其他十數件

乞を記附御旨るた見を供子と人婦は方御の文注御り依に告廣此

近刊

敬育界

(頁三百判倍六四行發日三月毎)

來る十一月三日 天長の佳辰をトし初號  
を發刊す請ふ陸續御購求の榮を賜へ其の  
要目左の如し

- 教育界 ● 學制 ● 論述  
● 教授訓練 ● 訪學 ● 傳記  
● 人物月旦 ● 藝文 ● 人物月旦  
● 問答 ● 藝文 ● 人物月旦  
● 世論一斑 ● 時時 ● 投稿 ● 雜誌  
● 新著紹介 ● 外國彙報 ● 任法 ● 日記  
● 叙述 ● 令評 ● 書記 ● 間錄 ● 評書 ● 記述

(賣捌所は全國にあり)

社會式株金港書堂發行所

東京日本橋區本町丁目三本日

考古學

解題定價

● 本邦に現存する銅鼓に就て：八  
● 探古證寫眞版：三宅水吉  
● 研究の好資料にして一讀の價値わ  
● 木井三郎（口繪の解釋）  
● 平子鐸嶺（五輪形石塔婆の異種）  
● 塙輪生（波紋土器）  
● 筑前國宗像郡田島石經并色定法  
● 一切經記（會員江藤止澄）  
● 吉田郡檍原村大字平福發見の陶棺  
● 清の師一筆（山縣昌藏）  
● 英田郡檍原村大字平福發見の陶棺  
● 真道（和田千吉）  
● 陶棺埋沒の研究（和田千吉）  
● 黒川美作國（和田千吉）

廿日第壹編第四號發行

(後付の四)

金港堂書籍株式會社

東京日本橋區本町

高嶋平三郎君著

訂正  
十版

# 教育的心理學

總クロース美本  
定價 金六十錢  
郵稅 金八錢

明治卅四年七月九日

文部省檢定済  
是れ最も進歩せる心理學の理論を直に適用すべく書き下したるものにして文章事實一に簡明を期し苟も普通の教育ある者は讀みて理解し難きの恐なし府縣なるものなり本書を發行し十版を重ねるに至る其價值より僅に一年有餘茲に又喋々の辯を要せず

再 版

# 新式女子遊戲法

右館編

全

定價 金拾參錢  
郵稅 金二錢

本書は清水直義氏が軒繪小學校長たりし際同校女子部に命じ調査實行せられたる女子の遊戲法を纂輯せられたるものにして第一東京府郡區聯合教育會が適良なる女子遊戲法の一として府知事の諮詢に答申したるものなり女子遊戯法改良の爲め適實のものと信すれば本館は同氏の許諾を得て茲に之を公刊す

●發行所

東京市神田區富山町八番地

特電話、本局  
一九五四番

右文館

(號十第卷一第一もど子と人婦)  
 (行發日五回一月每) 行發日五月十年四十三治明

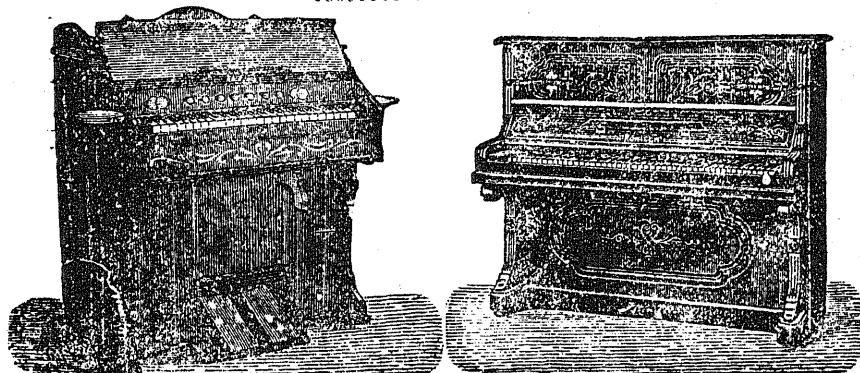
附險保  
琴風葉山

全タメ式十九八七六五四三二一  
 ル一場用號號號號號號號號等  
 第第一ソ新形形形形形形形形形形  
 三二一ソ新形形形形形形形形形形  
 號號號等  
 定定定定定定定定定定定定定定參  
 定價價價價價價價價價價價價價等  
 金金金金金金金金金金金金圓  
 金百百百百百百百百百百百百百圓  
 貳五百百百百百百百百百百百百圓  
 百百百百百百百百百百百百百圓  
 圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓  
 拾拾種  
 (す要を費造荷)



鈴木製金五圓以上五拾圓迄各種  
船來品金八圓以上百五拾圓迄各種

○洋琴 金參百圓以上貳千圓迄各種  
○ウイオリン



# 新 刊 廣 告

(ヨキ號略信電)  
(番九廿百五橋新話電) 番十川區京東地三町竹橋京共益社樂器店